

# 第2回 大学生の 学習・生活実態調査 報告書

ダイジェスト版

大学生の学習行動や  
意識はどのように変化  
しているのだろうか。

Benesse教育研究開発センターでは、2012年11月に全国の大学1～4年生を対象とした調査を実施しました。

この調査は、学習意識や学習行動、課外活動、生活時間、友人関係、進路選択、社会観・就労観など様々な角度から大学生の実像をとらえることを目的としています。

2回目となる本調査では、第1回調査(2008年実施)からの4年間の変化をみることができます。

## 調査概要

■調査テーマ 大学生の学習・生活に関する意識・実態

■調査目的 大学生の学習・生活全般にわたる意識や行動を多様な観点からとらえ、大学生の実態を明らかにし、大学教育を中心としたこれからの大学生を取り巻く環境を考えていくための基礎データとして活用すること。また、広く一般に結果を公表し、社会に還元すること。

■調査方法 インターネット調査

■対象と抽出方法 全国の大学1～4年生 4,911名(留学生、社会人経験者を除く)

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
男子	698	696	693	704	2,791
女子	527	531	530	532	2,120
計	1,225	1,227	1,223	1,236	4,911

インターネット調査会社の約130万人のモニター母集団のうち、「大学生」として登録されている約7万人に対して予備調査を実施。このうち、大学1～4年生(18～24歳、日本の大学校・海外の大学に通う場合を除く)にアンケートの協力を依頼。文部科学省の『平成24年度学校基本調査(速報)』の男女比、学部系統別の人数比率に近いサンプル構成を目指して回収を行った。

■調査時期 2012年11月3日～11月8日

■調査項目 高校での学習状況／大学選択で重視した点／大学受験の準備／入試方法・受験科目／大学の志望度／入学時の期待／大学生生活で力を入れたこと／大学への適応／通学日数・通学時間／学習時間／学習以外の時間の過ごし方／課外活動の実施状況／授業の出席率／大学教育の選好／授業への取り組み／授業の経験／成績／学習成果／先生との交流／友人関係／学生支援の利用状況／海外留学／進路意識／進路支援の活用状況／大学満足度／社会観・就労観／保護者との関係 など

### ■第1回調査について

実施時期：2008年10月上旬

対 象：大学1～4年生4,070名(男子2,439名、女子1,631名)

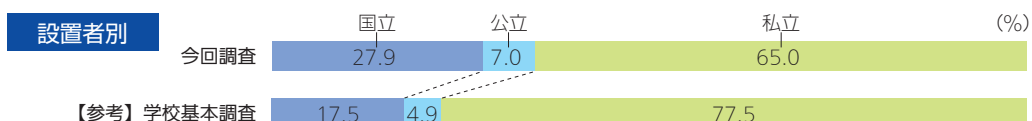
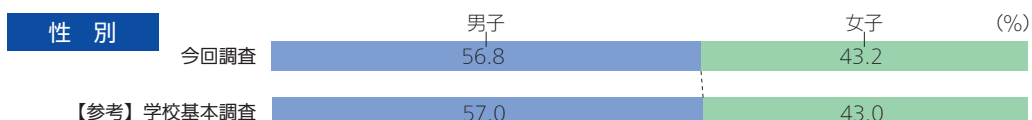
調査方法：インターネット調査

## 目次

大学受験対策を始めた時期……………	4	授業に対する意識……………	18
大学受験で経験した科目……………	5	大学の学生支援環境の利用……………	19
高校までの知識・理解が不足している科目…	6	入学後の進路変更の意向……………	20
大学選択で重視した点……………	8	友人関係……………	22
入学時の大学生生活への期待……………	9	海外留学……………	24
大学への通学・授業への出席状況……………	10	大学卒業後の進路……………	26
大学教育に対する選好……………	11	大学満足度……………	27
学習時間……………	12	保護者との関係……………	28
課外活動・生活時間……………	14	大学生の社会観・就労観など……………	30
授業の経験……………	16		

## 回答者の基本属性

以下で説明する基本属性は、有効回答数 4,911 名を母数とした数値である。なお参考として、文部科学省による『平成 24 年度学校基本調査（速報）』（以下、学校基本調査と略）の結果を掲載している。

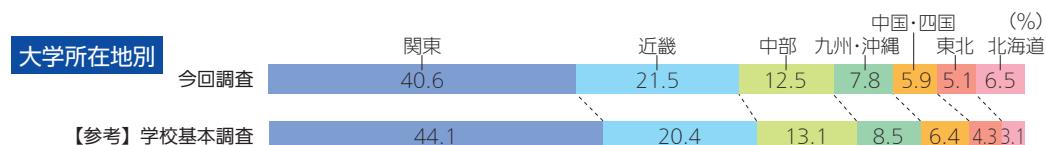


学部系統の区分	調査票で示した学部系統
人文学部	人文系統（文学、心理学、文化学など）
	外国語学系統（外国語学部など）
	国際学系統（国際関係学、国際情報など）
社会科学	社会学系統（社会学部、社会福祉学部など）
	法学系統（法学、政治学、政治経済学など）
	経済学系統（経済、経営、商学部、流通学など）
理工	理学系統（理学部、生命科学、地球環境など）
	工学系統（理工学部、システム工、情報工など）
農水産	農学・水産学系統（農、水産、生物資源、獣医、酪農など）
医・薬・保健	保健衛生系統（保健、保健医療、看護、看護医療など）
	医学（医学部）、歯学（歯学部）、薬学系統（薬学部など）
教育	教育学系統（学校教育学など）
その他	生活科学系統（家政、食物栄養、人間発達、保育など）
	芸術系統（造形、音楽など）
	総合科学（総合）系統（総合科学、教養、環境情報など）



※大学の入試難易度（偏差値）は、2011年度 第3回ベネッセ・駿台マーク模試・11月の偏差値（B判定基準〔合格可能性60%以上80%未満〕）を用いた。

※母数は、大学名の回答から入試難易度が判明した4,637名。



### 【本調査結果を読む際の留意点】

- ・本調査結果で使用する百分比(%)は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位以下を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。
- ・各図表内の( )内の値はサンプル数を表す。なお、とくに注記がない場合は有効回答数4,911を母数として算出している。

# 大学受験対策を始めた時期

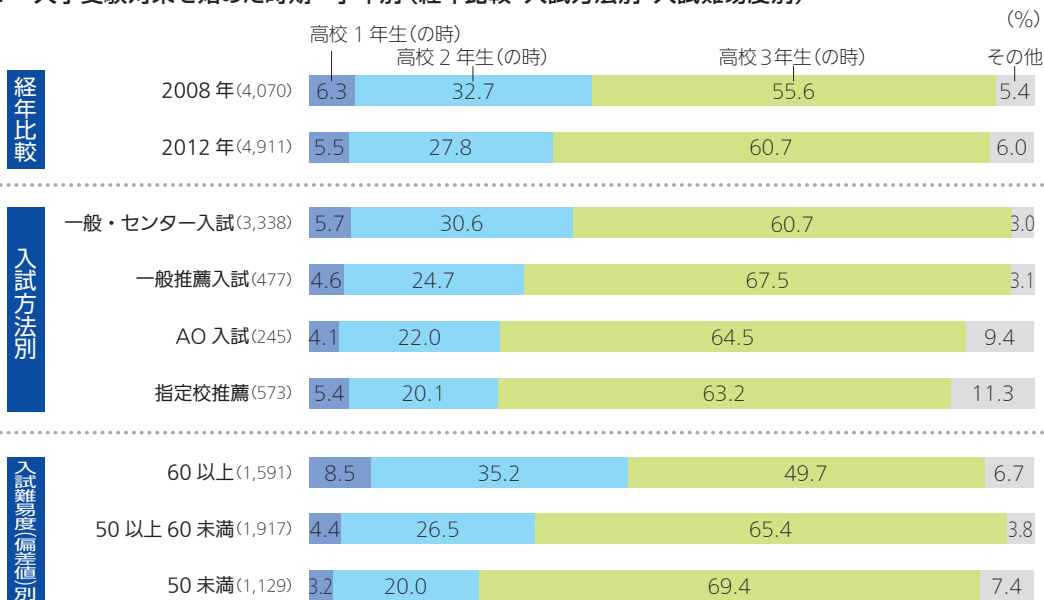
## 受験対策の開始時期は遅くなっている

受験対策を「高校2年生」から開始した人の比率は、2008年から2012年にかけて4.9ポイント減少。「高校3年生」から開始した人の比率が5.1ポイント増加し、約6割となった。月別にみると高校3年生の8月～10月に開始した人が、4.4ポイント増加している。



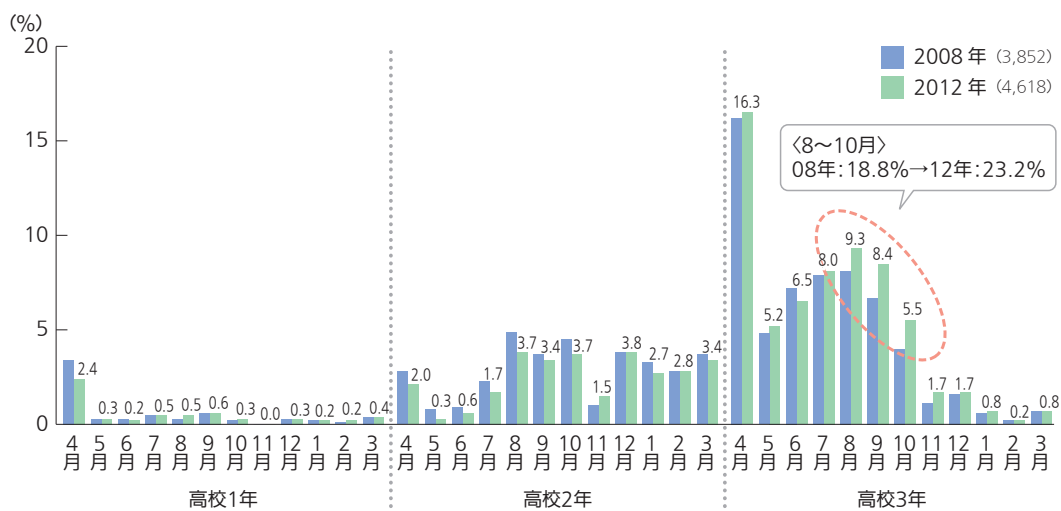
大学受験対策を始めたのはいつ頃ですか。

図1 大学受験対策を始めた時期－学年別（経年比較・入試方法別・入試難易度別）



注)入試方法の「その他」は省略している。

図2 大学受験対策を始めた時期一月別（経年比較）



注1) グラフ上の数値は2012年の値。2008年は省略している。

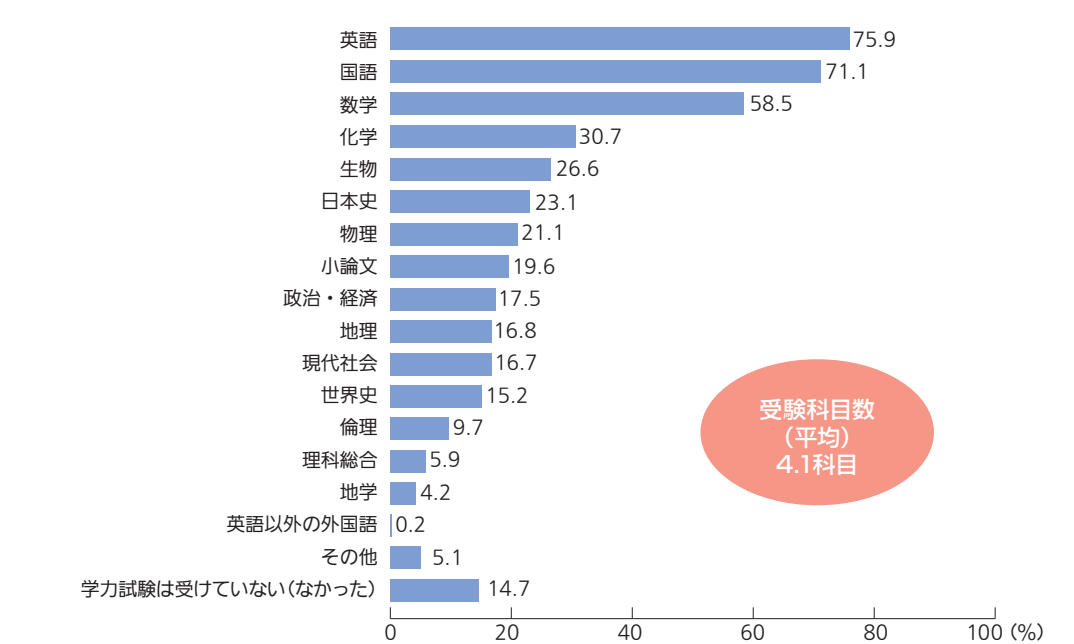
注2) 対象は、受験対策の開始時期が「その他」の回答者を除外している。

受験科目数の平均は4.1科目。一方で、学力試験を受けていない人が14.7%

受験で経験した科目は、「英語」(75.9%)、「国語」(71.1%)、「数学」(58.5%)の3つがもっとも高い。平均受験科目数は4.1科目だが、「学力試験を受けていない」人も14.7%存在する。学部系統別には「理工」系統で「数学」の受験比率がもっとも高いが、「理工」以外では「英語」が高い。また、入試方法別の平均受験科目数は、「一般・センター入試」5.3科目に対し「一般推薦入試」2.6科目、「AO入試」1.6科目、設置者別には、「国公立」5.8科目に対し「私立」が3.2科目である。

**Q** あなたは大学受験で、どのような科目で受験しましたか。経験したもののすべてについてお選びください。

図3 大学受験で経験した科目（全体）



注1) 複数回答。  
注2) 受験科目数は「その他」「学力試験を受けていない(なかった)」を「0」、それ以外を「1」として選択数の平均値を算出したもの。以下表1・表2も同じ。  
注3) サンプル数は4,911名。

表1 大学受験で経験した科目（上位5科目）と科目数（学部系統別） (%)

		人文科学 (749)		社会科学 (1,693)		理工 (937)		農水産 (216)		医・薬・保健 (556)		教育 (261)	
上位 5科目	1	英語	75.4	英語	73.6	数学	82.6	英語	85.6	英語	83.8	英語	77.4
	2	国語	74.4	国語	72.2	英語	80.7	数学	85.2	数学	79.7	国語	75.9
	3	数学	41.7	数学	46.4	国語	69.5	国語	76.4	化学	70.5	数学	65.9
	4	日本史	32.3	日本史	32.9	物理	67.0	化学	75.0	国語	70.1	生物	37.5
	5	生物	27.0	政治・経済	25.9	化学	65.6	生物	58.8	生物	42.3	日本史	31.4
受験科目数 (平均)		3.7 科目		3.8 科目		4.7 科目		5.2 科目		5.0 科目		4.6 科目	

注) 学部系統「その他」は省略している。

表2 大学受験で経験した科目数（入試方法別・設置者別）

入試方法別				設置者別	
一般・センター 入試 (3,338)	一般推薦入試 (477)	AO 入試 (245)	指定校推薦 (573)	国公立 (1,717)	私立 (3,194)
5.3 科目	2.6 科目	1.6 科目	0.9 科目	5.8 科目	3.2 科目

# 高校までの知識・理解が不足している科目

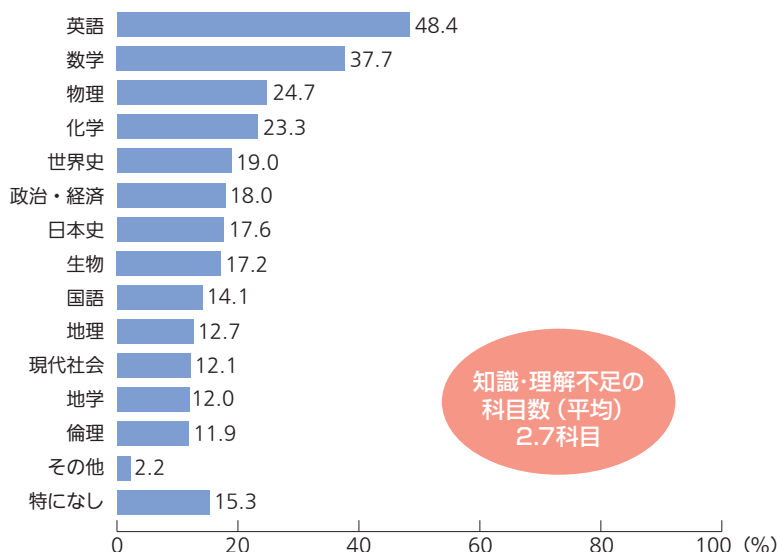
## どの学部系統でも「英語」を不十分と感じている

大学で学ぶ上で、知識・理解の不足を感じている高校までの科目をたずねたところ、全体では「英語」が48.4%でもっとも高く、どの学部系統でも最多である。知識・理解不足の科目として選択された科目数の平均値は2.7科目であり、入試方法別では、「一般・センター入試」受験者で2.5科目、「AO入試」では3.6科目となっている。



あなたが大学で学ぶ上で、高校までの知識・理解が不足していると感じている科目はありますか。あてはまるものすべてをお選びください。

図4 高校までの知識・理解が不足している科目（全体）



注1) 複数回答。

注2) 科目数は「その他」「特になし」を除く科目の選択数。以下表3・表4も同じ。

注3) サンプル数は4,911名。

表3 高校までの知識・理解が不足している上位5科目と科目数（学部系統別）

		人文科学 (749)		社会科学 (1,693)		理工 (937)		農水産 (216)		医・薬・保健 (556)		教育 (261)	
上位 5科目	1	英語	47.3	英語	49.3	英語	50.3	英語	43.1	英語	42.1	英語	54.4
	2	数学	37.1	数学	41.2	数学	37.6	化学	42.1	物理	34.9	数学	43.7
	3	世界史	29.9	世界史	21.7	物理	36.1	数学	37.0	化学	27.3	化学	28.4
	4	日本史	25.6	政治・経済	21.0	化学	25.3	物理	35.6	生物	26.6	日本史	28.4
	5	政治・経済	24.7	日本史	19.8	国語	16.5	生物	31.5	数学	25.9	世界史	28.0
知識・理解不足 科目数（平均）		3.0 科目		2.7 科目		2.5 科目		2.7 科目		2.2 科目		3.5 科目	

注) 学部系統「その他」は省略している。

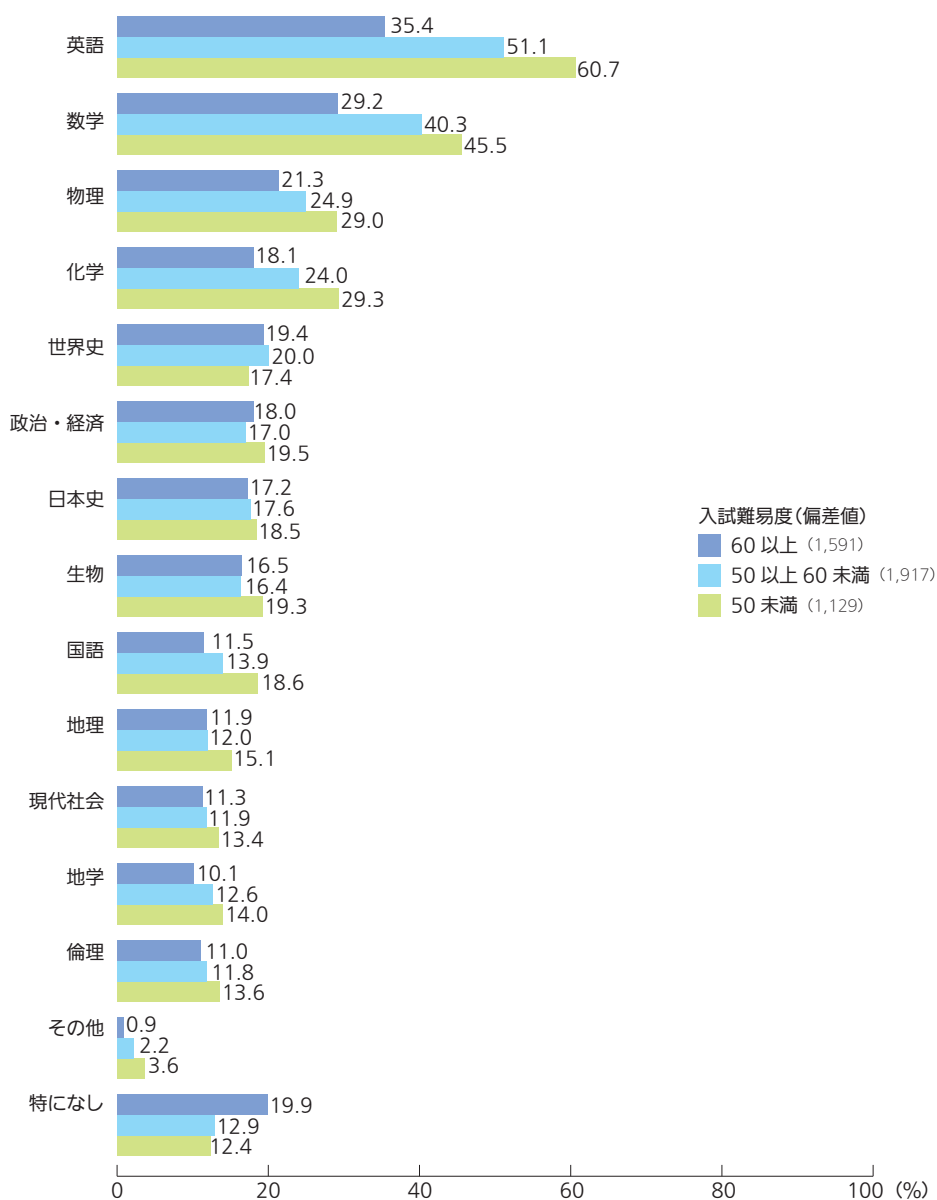
表4 高校までの知識・理解が不足している科目数（入試方法別・設置者別）

入試方法別				設置者別	
一般・センター 入試 (3,338)	一般推薦入試 (477)	AO入試 (245)	指定校推薦 (573)	国公立 (1,717)	私立 (3,194)
2.5 科目	2.9 科目	3.6 科目	3.1 科目	2.4 科目	2.9 科目

## 英語と数学は入試難易度によって知識・理解不足と感じる割合に大きな差

入試難易度(偏差値)別に知識・理解不足を感じている科目をみると、差異が大きいのは「英語」で、偏差値「60以上」で35.4%であるのに対し、「50未満」では60.7%と25.3ポイントの違いがある。次いで「数学」で、「60以上」が29.2%に対し「50未満」が45.5%と16.3ポイントの差がみられる。「物理」「化学」「国語」も若干違いがみられるが、その他の科目については、入試難易度別の大きな違いはみられない。

図5 高校までの知識・理解が不足している科目(入試難易度(偏差値)別)





## 「興味のある学問分野があること」が2008年から変わらずもっとも高い

6割台が「興味のある学問分野があること」、5割弱が「入試難易度が自分に合っていること」を重視しており、この4年間で大きな変化はみられない。学部系統別では「社会科学」系統で「興味のある学問分野があること」が5割程度と相対的に低い。また、「医・薬・保健」「教育」系統では、「取りたい資格や免許が取得できること」が「興味のある学問分野があること」に次いで高くなっている。



受験する大学・学部を決める際に重視した点について、あてはまるものすべてをお選びください。

図6 受験する大学・学部を決める際に重視した点（経年比較）

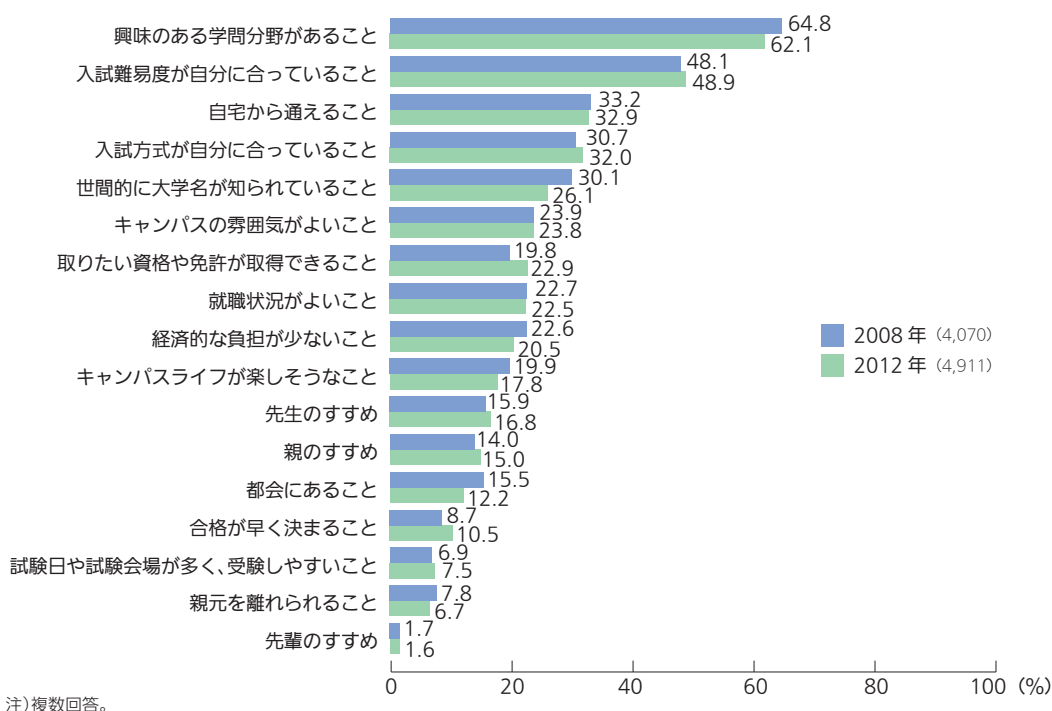
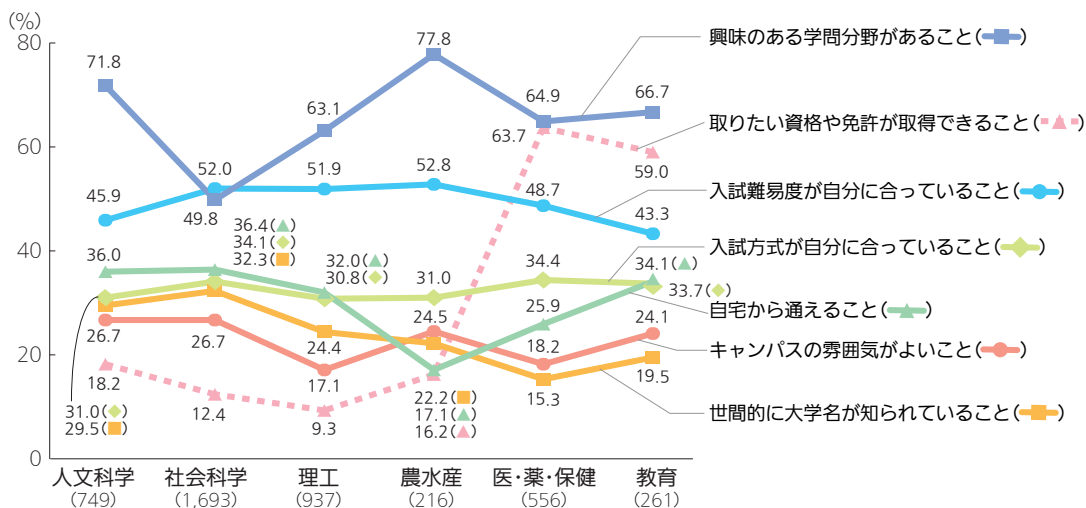


図7 受験する大学・学部を決める際に重視した点（上位7項目・学部系統別）





# 入学時の大学生活への期待

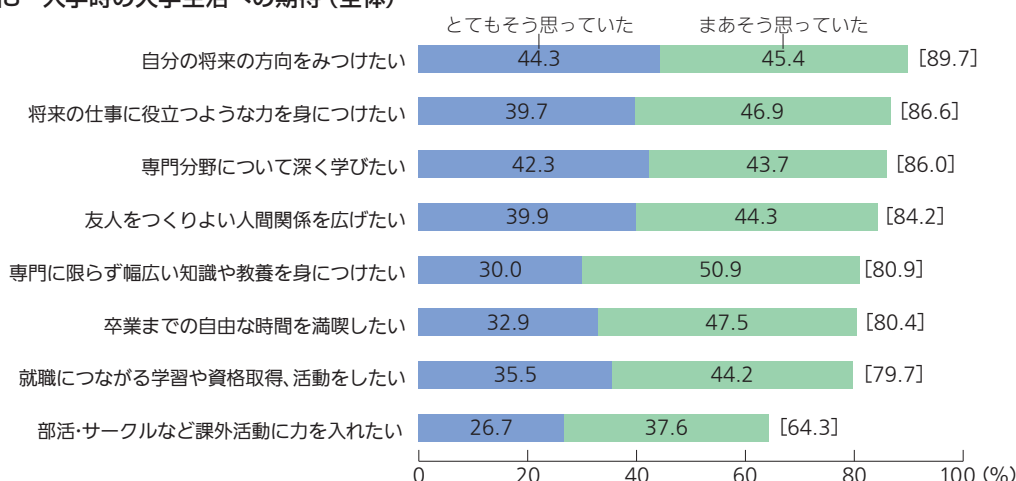
## 入学時の期待は「専門分野について深く学びたい」が最多

入学時に期待していたことをたずねたところ、「自分の将来の方向をみつけない」「専門分野について深く学びたい」は「とてもそう思っていた」とともに4割を超えている。他の項目も総じて高く、大学生活への期待は多岐にわたる。さらに、もっとも強く思っていたことを1つだけ選んでもらった結果、高かったのが「専門分野について深く学びたい」で33.5%であった。とくに、「医・薬・保健」をはじめとした理系の学部では4割を超えている。



あなたが大学に入学した時、次のことをどのくらい思っていましたか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図8 入学時の大学生活への期待（全体）



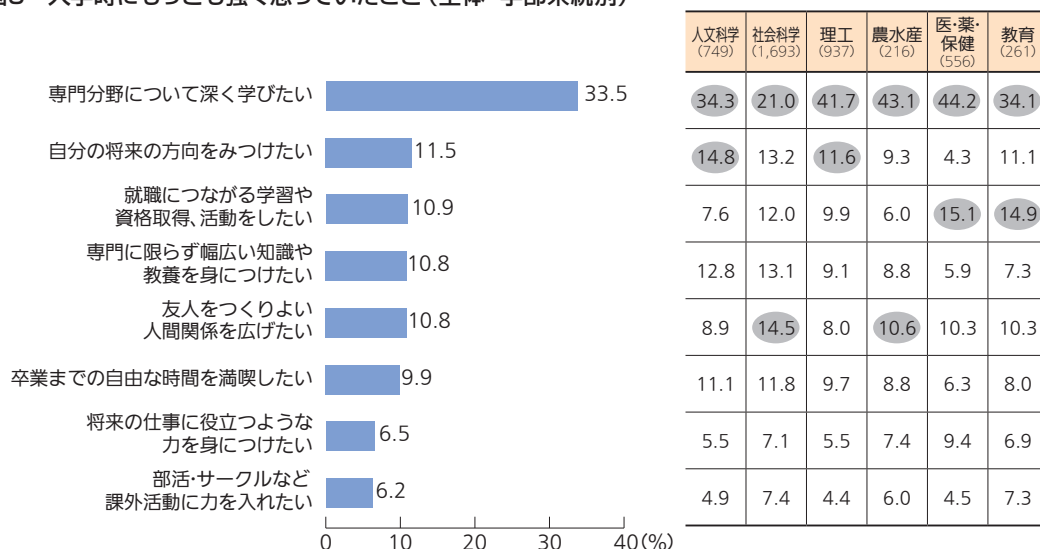
注1) 選択肢は「とてもそう思っていた」「まあそう思っていた」「あまりそう思っていなかった」「全くそう思っていなかった」の4段階。

注2) [ ]内は「とてもそう思っていた」+「まあそう思っていた」の合計 (%) を表している。 注3) サンプル数は4,911名。



前問の8項目の中で、あなたが入学時にもっとも強く思っていたことはどれですか。(単数回答)

図9 入学時にもっとも強く思っていたこと（全体・学部系統別）



注1) 表では、学部系統「その他」は省略している。

注2) 表では、学部系統別に上位2項目に網掛けをしている。

## 大学で過ごす時間もっとも長いのは「医・薬・保健」、短いのは「社会科学」系統

1週間あたりの通学日数は4.4日、大学で過ごす時間は24時間30分で、4年前からあまり変化はみられない。調査実施時(11月)の学期の履修科目数の平均は9.8科目で、授業への出席率は8.6割と、ほとんどに出席している。授業などへの出席時間を学年別にみると、1・2年生で「21時間以上」が4割前後でもっとも多く、3年生では「11～15時間」が22.3%、4年生になると、「3～5時間」が27.1%で最多となっている。

Q

- あなたは1週間のうち、だいたい何日大学に通っていますか。
- 1週間を通して大学で過ごす時間の合計をお答えください。
- あなたは今学期いくつ科目を履修していますか。
- あなたは授業に平均してどの程度出席していますか。

表5 大学生の通学状況・履修科目数・授業への出席状況(全体・学年別・学部系統別)

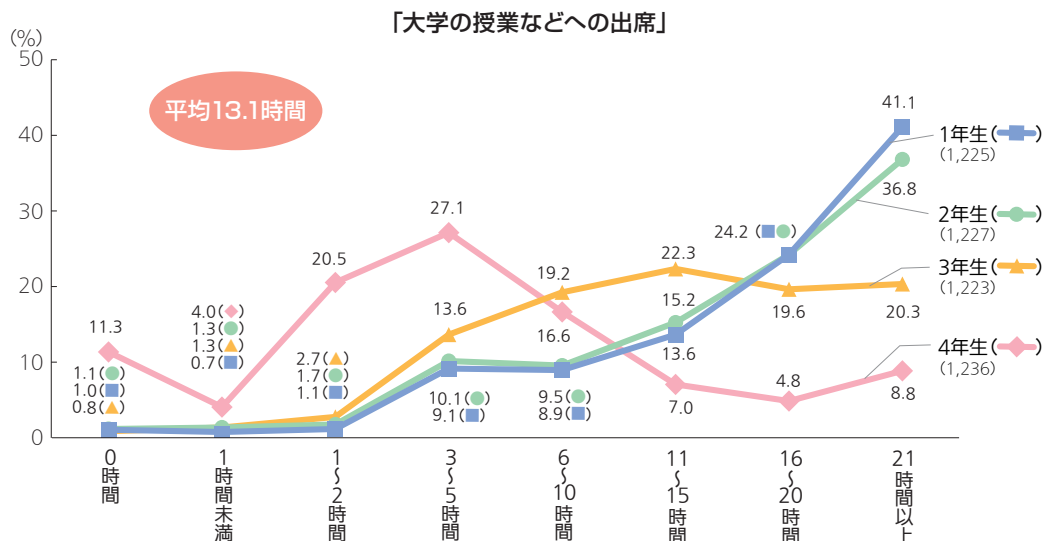
	a) 1週間の通学日数		b) 1週間を通して大学で過ごす時間		c) 今学期の履修科目数	d) 授業への出席率	
	2012年	2008年	2012年	2008年	2012年	2012年	2008年
全体	4.4日	4.4日	24時間30分	25時間06分	9.8科目	8.6割	8.7割
学年別	1年生	5.0日	28時間42分	29時間06分	13.5科目	8.9割	9.1割
	2年生	4.8日	27時間18分	28時間12分	12.4科目	8.8割	8.8割
	3年生	4.4日	23時間30分	24時間18分	9.6科目	8.7割	8.7割
	4年生	3.4日	18時間24分	19時間06分	3.9科目	8.0割	8.2割
学部系統別	人文科学	4.1日	21時間18分	23時間36分	9.5科目	8.5割	8.8割
	社会科学	4.1日	20時間54分	21時間36分	9.8科目	8.2割	8.3割
	理工	4.7日	27時間36分	28時間18分	9.5科目	8.9割	8.9割
	農水産	4.9日	30時間42分	33時間12分	9.0科目	9.0割	9.1割
	医・薬・保健	4.9日	32時間18分	34時間00分	11.0科目	9.2割	9.4割
	教育	4.2日	23時間48分	26時間30分	10.1科目	8.8割	9.0割
	その他	4.4日	24時間12分	25時間00分	9.7科目	8.7割	8.9割

注)「今学期の履修科目数」は2008年調査ではたずねていない。

Q

ふだんの時間の過ごし方について、次の項目は1週間(月曜日～日曜日)で何時間くらいになりますか。今学期の平均的な1週間を振り返って、あてはまるもの1つをお選びください。

図10 1週間あたりの授業などへの出席時間(学年別)



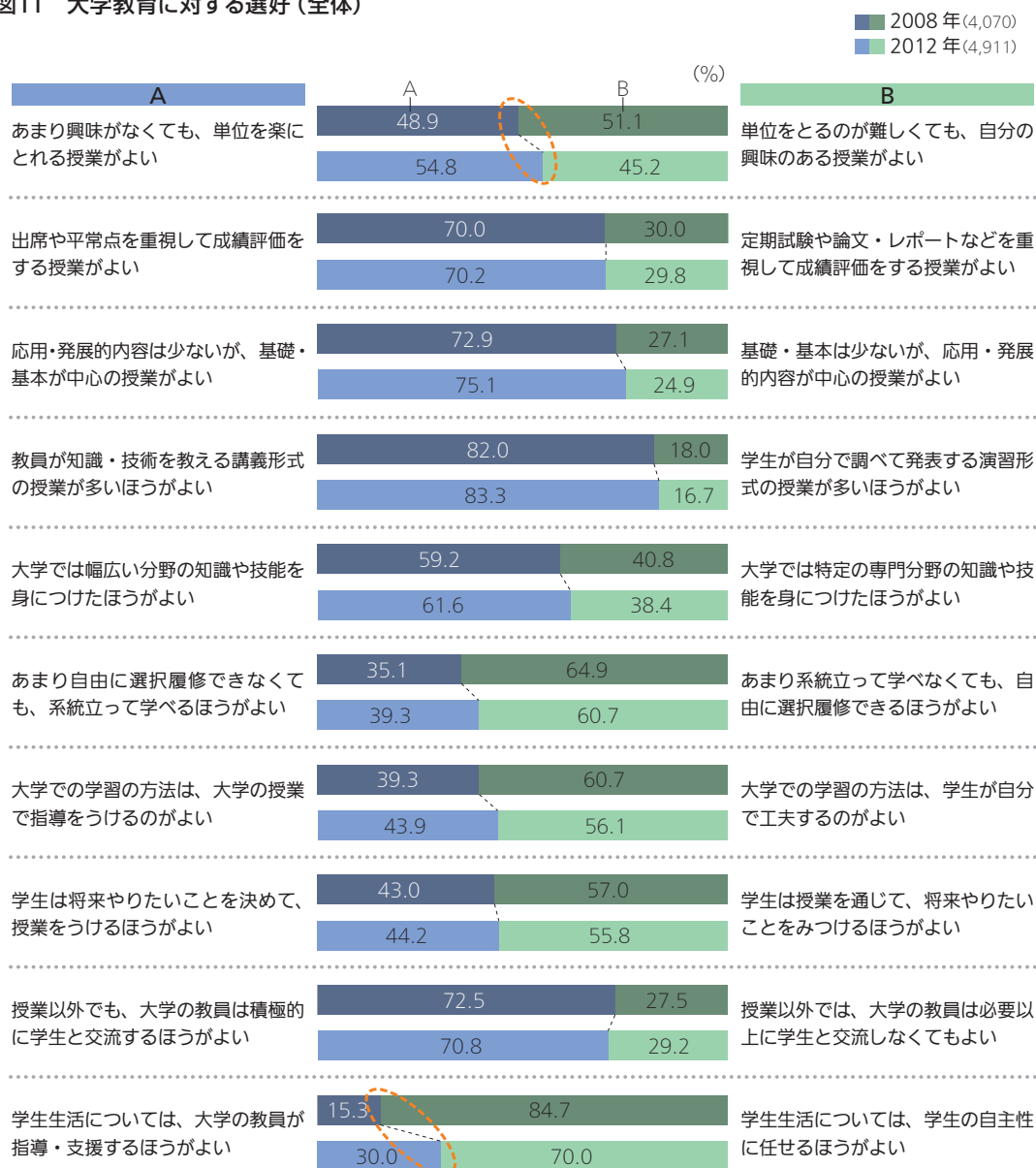
## 「学生生活については大学の教員が指導・支援するほうがよい」と考える学生が増加

2008年から変化のみられた項目として、学生生活について、「学生の自主性に任せる」より「大学の教員が指導・支援するほうがよい」と考える学生が2008年の15.3%から2012年は30.0%に増えた。また、「単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業」よりも「あまり興味がなくとも、単位を楽にとれる授業がよい」と考える学生が48.9%から54.8%に増え、過半数を超えた。学生の受け身な姿勢が強まっている様子がうかがえる。



大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。近いものをお選びください。

図11 大学教育に対する選好（全体）



注) 2008年調査から5ポイント以上の違いがみられたものに○をしていく。

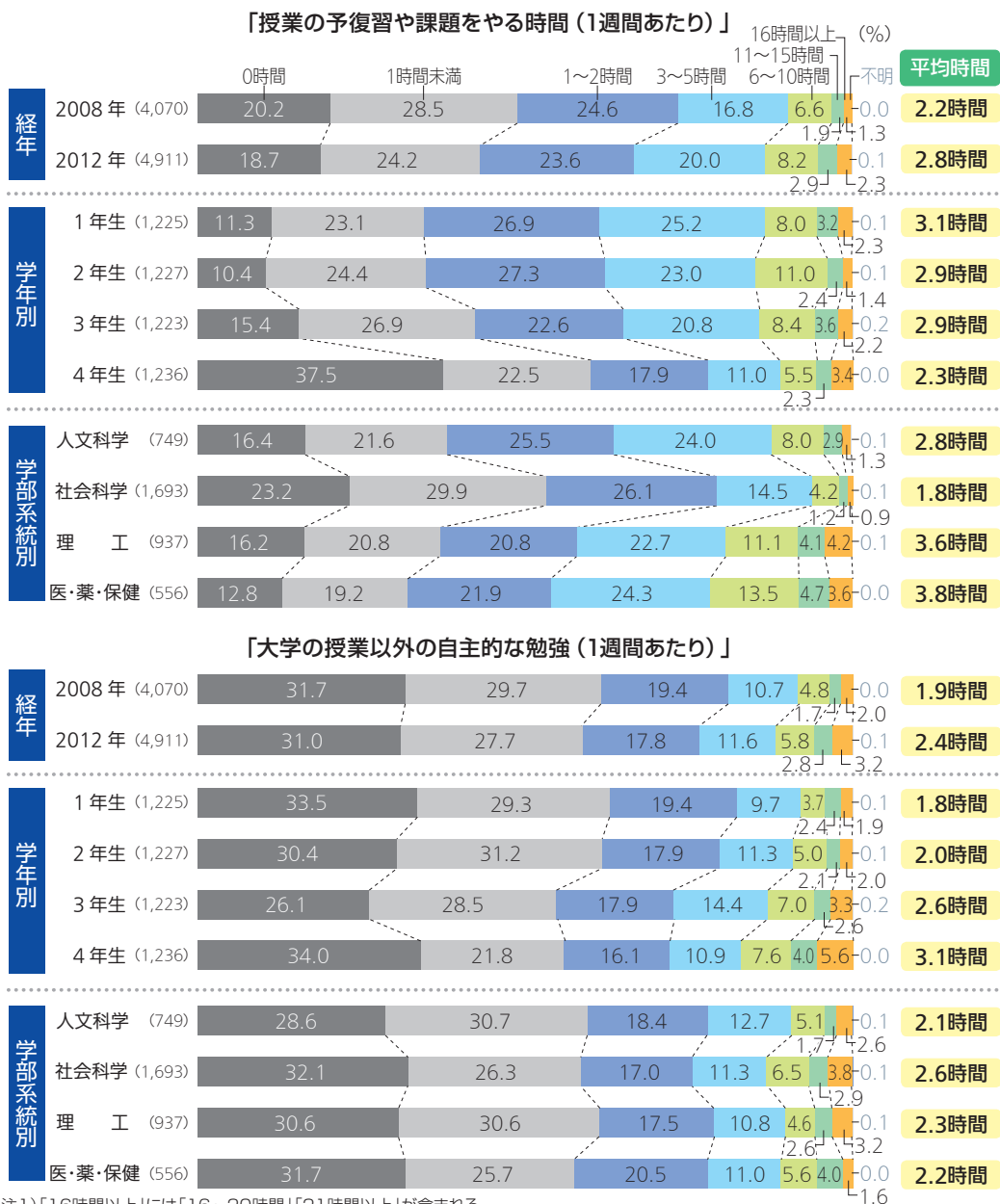
## 授業の予復習や課題をやる時間が微増

「授業の予復習や課題」を1週間あたり「1～2時間」以上している割合（「1～2時間」～「16時間以上」の合計値、以下同）は全体で2008年51.2%→2012年57.0%と5.8ポイント増加。平均時間でみると2.2時間→2.8時間となった。学年別には履修科目数の少なくなる4年生で時間が少なく、学部系統別では「社会科学」系統で「1時間未満」（「1時間未満」+「0時間」）が5割を超える。一方、「大学の授業以外の自主的な勉強」については、経年での変化はみられず、学年別には高学年になると平均時間は若干増加する。



ふだんの時間の過ごし方について、次の項目は1週間（月曜日～日曜日）で何時間くらいになりますか。今学期の平均的な1週間を振り返って、それぞれについてあてはまるもの1つをお選びください。

図12 大学の授業以外の1週間あたりの学習時間（経年比較・学年別・学部系統別）



注1)「16時間以上」には「16～20時間」「21時間以上」が含まれる。

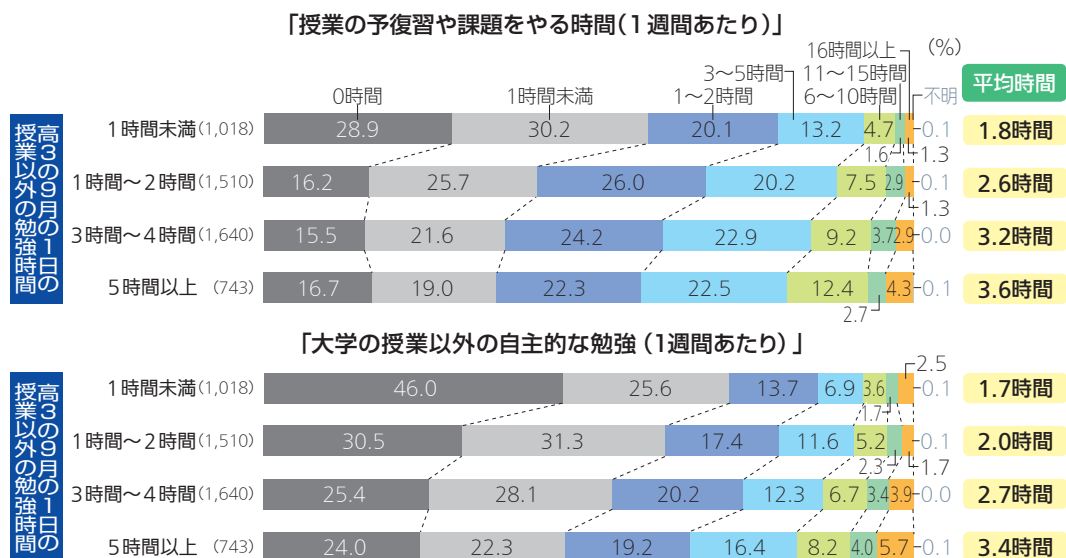
注2)平均時間は、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1～2時間」を1.5…と各選択肢の中央値で置き換えた上で算出している（不明は除く）。

注3)学部系統別の比較はサンプル数の多い4学部系統とし、その他は省略している。

## 高校時代に勉強していた層も、大学では授業以外の学習時間が少なくなる

高校時代と大学での授業以外の学習時間を比較すると、高校時代に1日「5時間以上」勉強していた層も、大学での「授業の予復習や課題をやる時間」は1週間あたり1時間未満が35.7%（「0時間」+「1時間未満」、以下同）、「授業以外の自主的な勉強」は46.3%と学習時間は減少する。同様に高校時代の勉強の様子をたずねた質問でも、高校時代に予復習をしていたと回答した層（「図14の「あてはまる群」」）も大学で「授業の予復習や課題をやる時間」は1時間未満が約3分の1、「授業以外の自主的な勉強」は約5割が1時間未満である。

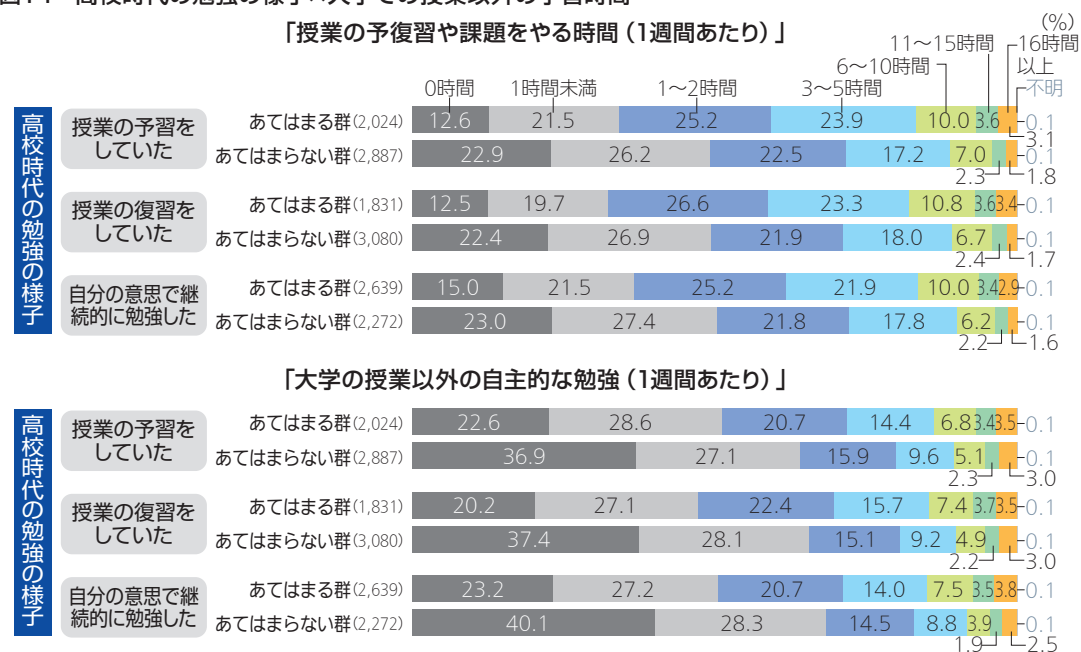
図13 高校時代の授業以外の勉強時間×大学での授業以外の学習時間



注1) 高校時代の勉強時間は1日あたりの時間、大学時代の学習時間は1週間あたりの時間を表す。

注2) 平均時間は、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1～2時間」を1.5…と各選択肢の中央値に置き換えた上で算出している（不明は除く）。

図14 高校時代の勉強の様子×大学での授業以外の学習時間



注) 高校時代の勉強の様子は、「高校の時の学校や家での勉強の様子」としてたずねたもの。「あてはまる群」は「とてもあてはまる」

「まああてはまる」と回答した人、「あてはまらない群」は「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した人を表す。

## サークルや部活動への所属は57.2%、アルバイトは63.8%

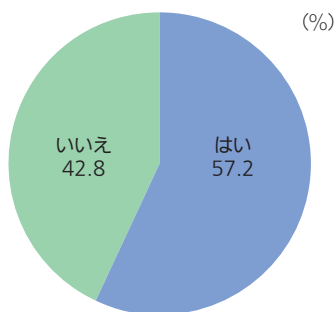
サークルや部活動に所属している割合は57.2%、1週間あたりの平均活動時間は4.8時間である。一方、アルバイトをしている割合は63.8%で、2008年調査の63.7%からほとんど増減はなく、平均活動時間は10.2時間となっている。



- あなたのサークルや部活動、アルバイトの状況についてあてはまるもの1つをお選びください。
- ふだんの時間の過ごし方について、次の項目は1週間(月曜日～日曜日)で何時間くらいになりますか。今学期の平均的な1週間を振り返って、それぞれについてあてはまるもの1つをお選びください。

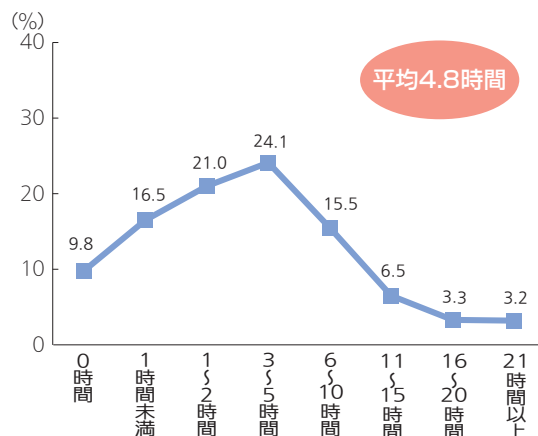
図15 サークルや部活動への参加状況(全体)

「サークルや部活動に所属している」



注) サンプル数は4,911名。

図16 サークルや部活動の1週間あたりの活動時間



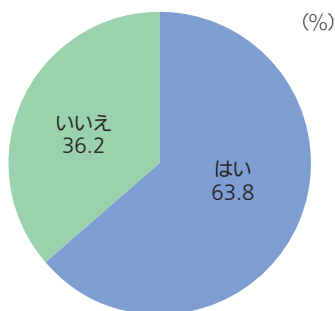
注1) 対象は、「サークルや部活動に所属している」に「はい」と回答した2,810名。

注2) 平均時間は、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1～2時間」を1.5…と各選択肢の中央値に置き換えた上で算出している(不明は除く)。

注3) 「不明」は省略している。

図17 アルバイトの就労有無(全体)

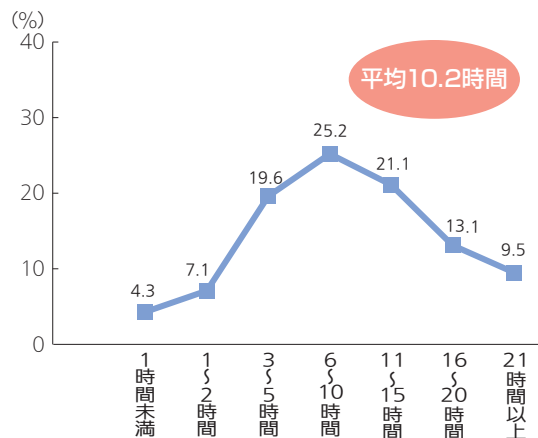
「アルバイトをしている」



2008年調査  
はい→63.7%  
いいえ→36.3%

注) サンプル数は4,911名。

図18 アルバイトの1週間あたりの活動時間



注1) 対象は、「アルバイトをしている」に「はい」と回答した3,135名。

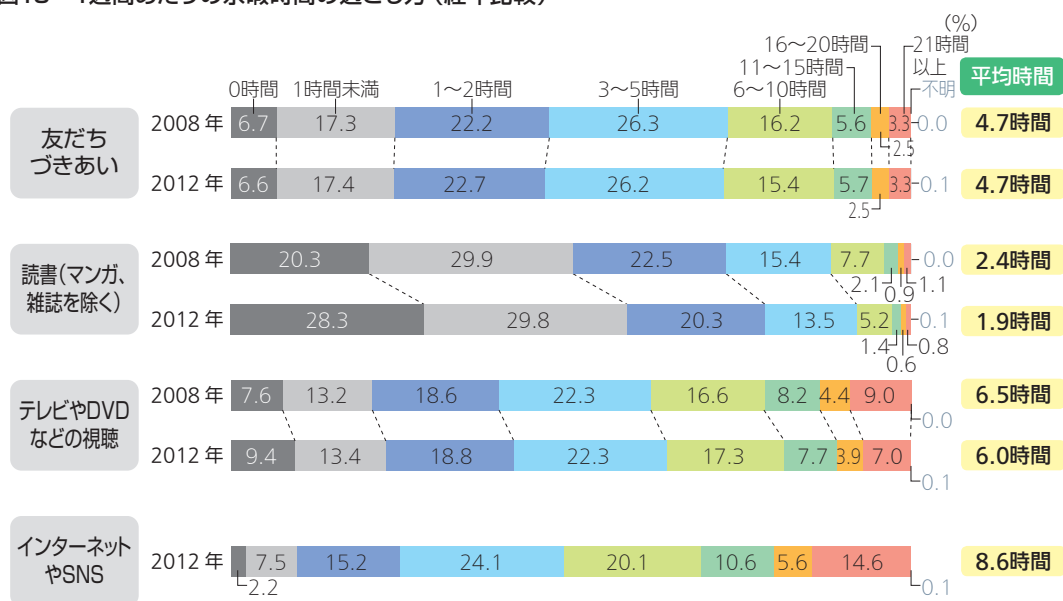
注2) 平均時間は、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1～2時間」を1.5…と各選択肢の中央値に置き換えた上で算出している(不明は除く)。

注3) 「不明」は省略している。

## 読書をしない大学生が増加

学習やサークル・アルバイト以外の時間の過ごし方について、経年で比較をすると、「読書(マンガ、雑誌を除く)」が1週間で「0時間」との回答が2008年の20.3%から2012年は28.3%と8.0ポイント増加した。「友だちづきあい」や「テレビやDVDなどの視聴」は経年での変化はほとんどみられない。「テレビやDVDなどの視聴」と「インターネットやSNS」の平均時間はそれぞれ6.0時間、8.6時間と「インターネットやSNS」の方が長い。ただし、本調査がインターネット調査であるので、その影響にも留意する必要がある。

図19 1週間あたりの余暇時間の過ごし方(経年比較)

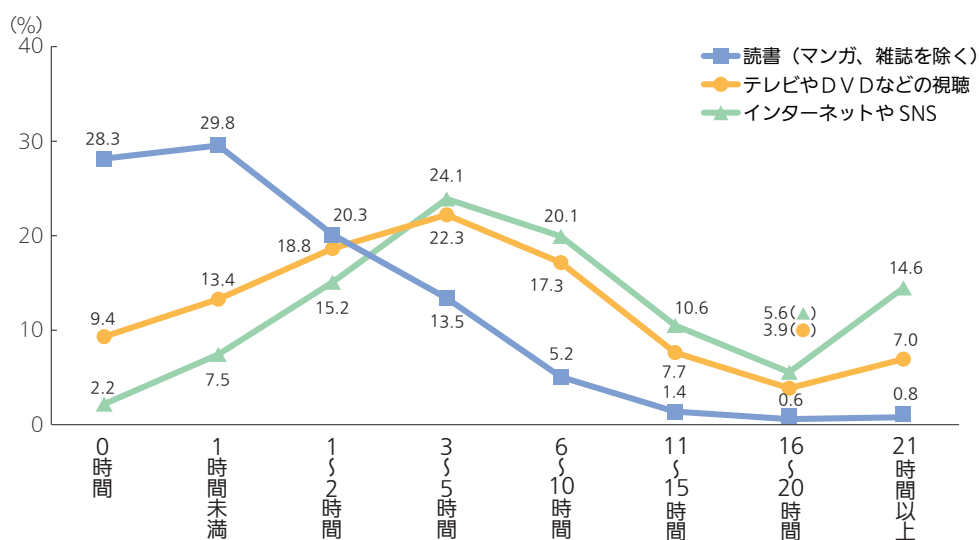


注1)「インターネットやSNS」は2008年調査ではたずねていない。

注2) 平均時間は、「0時間」を0、「1時間未満」を0.5、「1~2時間」を1.5…と各選択肢の中央値に置き換えた上で算出している(不明は除く)。

注3) サンプル数は2008年4,070名、2012年4,911名。

図20 「読書」「テレビ・DVD」「インターネット・SNS」の時間の比較



注1)「不明」は省略している。

注2) サンプル数は4,911名。



## アクティブラーニング型の授業が増えている

授業の方法や内容別に経験の頻度をたずねたところ、2008年から学生の経験割合（「よくあった」+「ある程度あった」の%）が増えた項目が「ディスカッションの機会を取り入れた授業」（7.5ポイント増）、「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」（6.7ポイント増）、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」（6.6ポイント増）であった。学生参加型の授業が増えつつあるようだ。



あなたはこれまで大学で、次のような授業を経験しましたか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図21 授業の経験（全体）

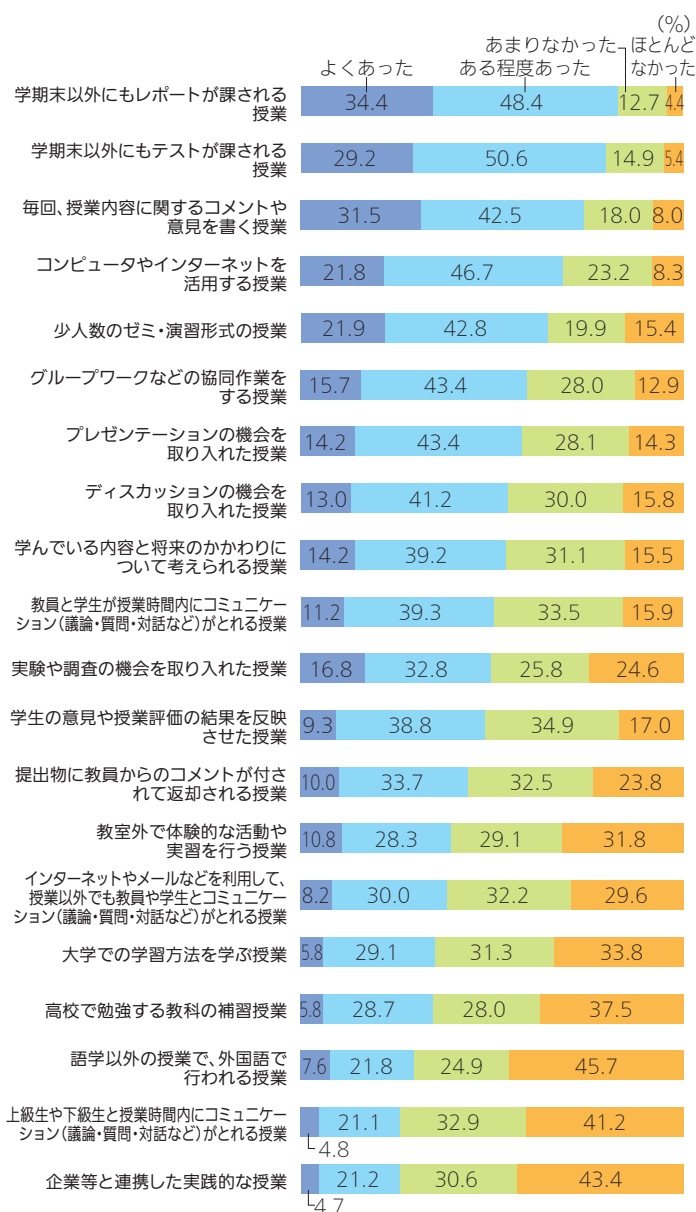
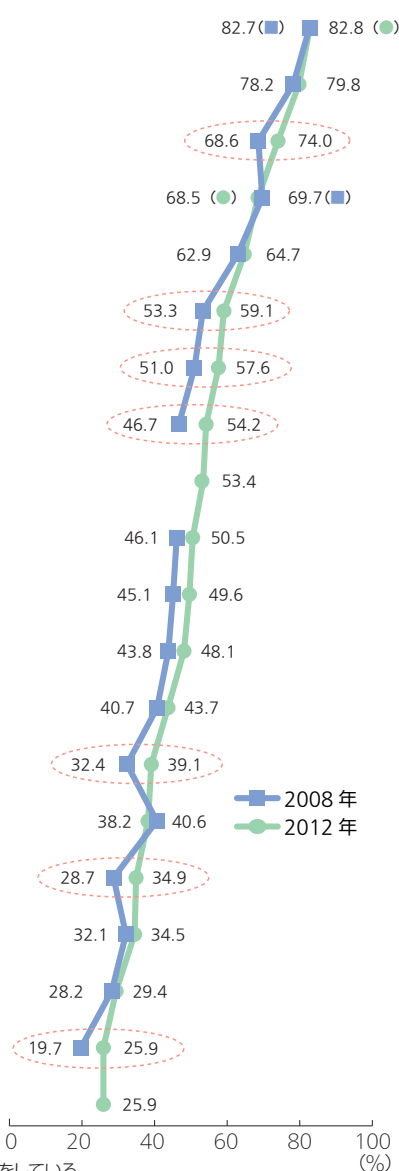


図22 授業の経験（経年比較）

「よくあった」+「ある程度あった」の%



注1) 経年比較については、2008年調査から5ポイント以上の違いがみられたものに○をしていいる。

注2) 「学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業」「企業等と連携した実践的な授業」は2008年調査ではたずねていない。

注3) サンプル数は2008年4,070名、2012年4,911名。

学部系統別にみると、それぞれの学問分野の特性によって授業の形式が異なっている様子がうかがえる。4つの学部系統で比較すると、前述の「ディスカッションの機会を取り入れた授業」「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」については、「人文科学」「医・薬・保健」で経験者の割合が6割前後と高くなっている。

図23 授業の経験(学部系統別)



注)学部系統別の比較はサンプル数の多い4学部系統とし、その他は省略している。

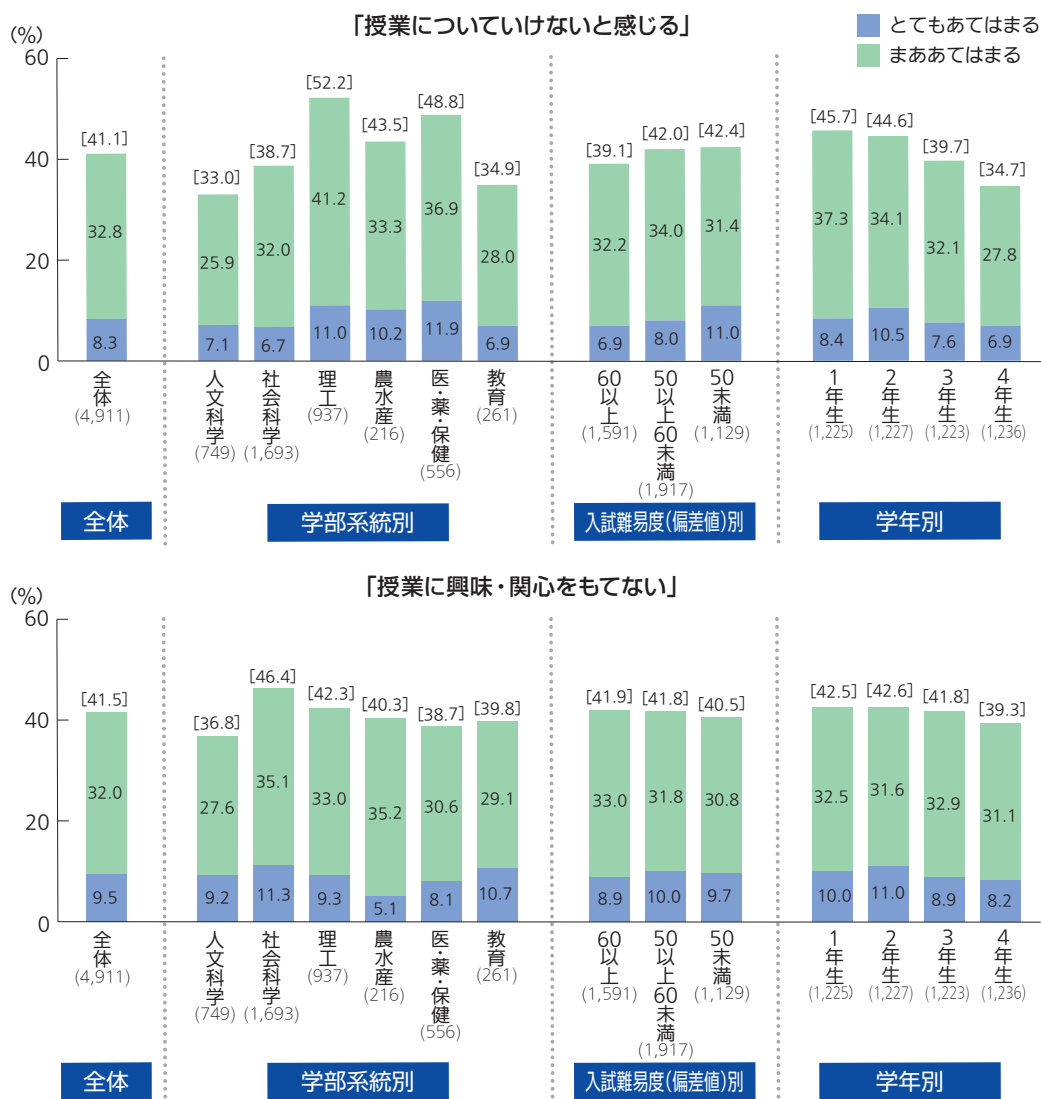
## 「授業についていけない」と感じる学生が理工系で5割

大学の授業にどの程度適応できているのか、2つの観点からたずねた。まず「授業についていけないと感じる」割合は全体で41.1%（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同）、学部系統別では「理工」系統で52.2%と高くなっている。学年別にみると高学年になるほど減少し、1年生（45.7%）と4年生（34.7%）で11ポイントの違いがある。次に、「授業に興味・関心をもてない」と感じている割合は全体で41.5%で、「社会科学」系統で46.4%と若干高いものの全般に属性別の違いは少なく、共通して4割程度がそのように感じている。



あなたは、ふだんの大学での学習について、次のことがどの程度あてはまりますか。

図24 授業への適応（全体・学部系統別・入試難易度別・学年別）



注1) [ ]内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計(%)を表している。

注2) 選択肢は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4段階。

注3) 学部系統別「その他」は省略している。

## 学生支援環境を利用している割合は2割弱

大学の学生支援の利用状況は、「クラス担任や指導教員との定期的な個人面談」が19.2%（「よく利用する」＋「時々利用する」の％）でもっとも高いが、他の項目もあまり変わりはなく1割台である。次に、図26は大学の規模（学部数）別に「（該当する支援環境が）ない」の値に違いのみられた項目をとりあげたものである。小規模大学ほど「学習方法（レポートの書き方など）を学ぶための課外講座」や上級生などの学生を活用したサポート等の支援環境が整っていない。



あなたは、次のような学生に対する支援環境をどの程度利用していますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図25 学生支援環境の利用状況（全体）

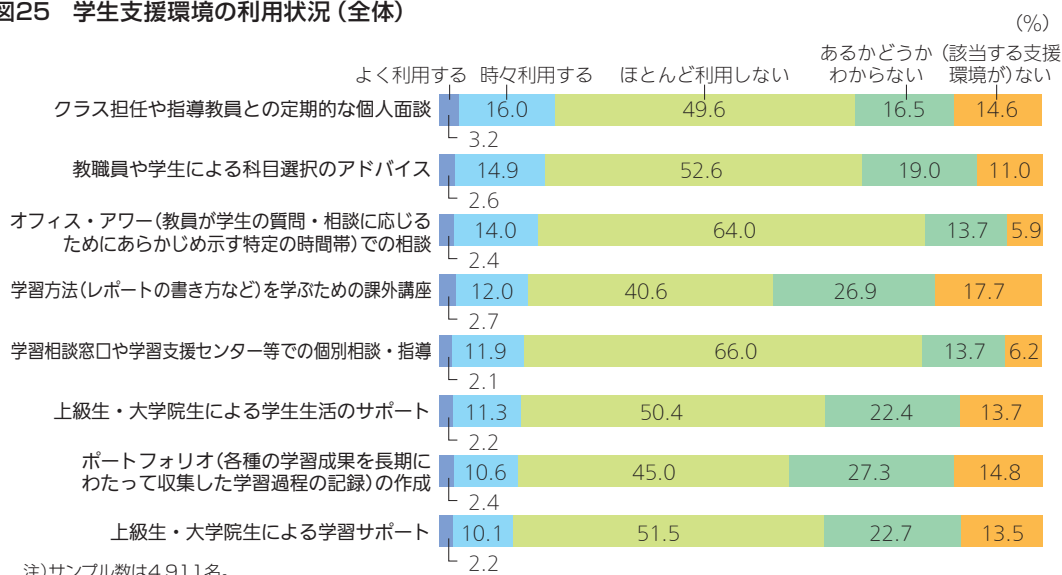
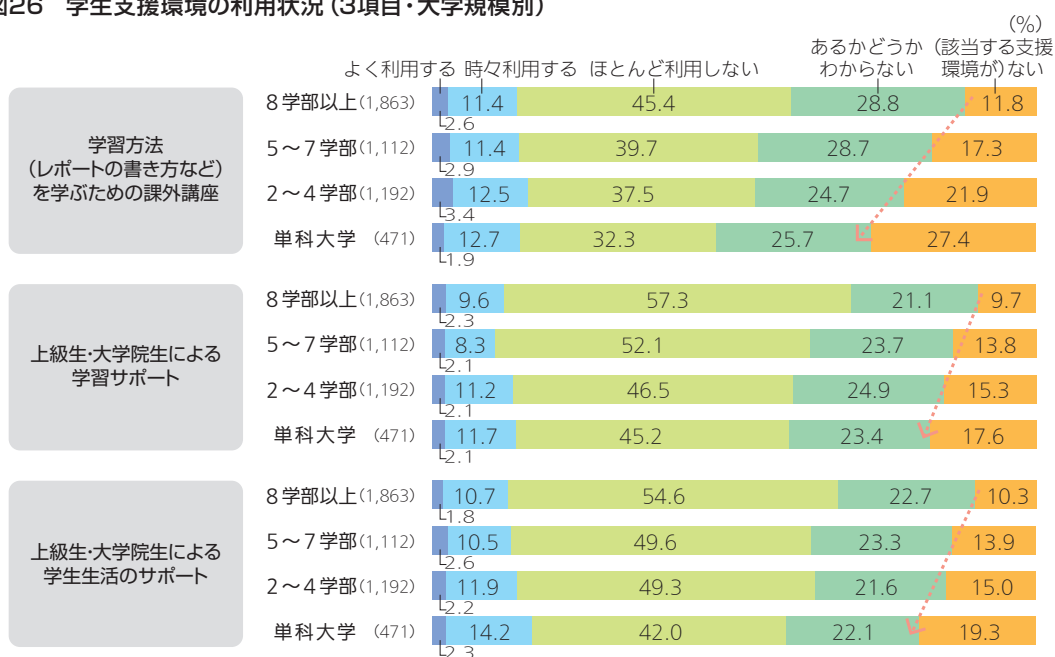


図26 学生支援環境の利用状況（3項目・大学規模別）



注1）サンプル数は大学名の回答のあった4,638名。 注2）大学規模別に違いのみられた3項目のみ示している。

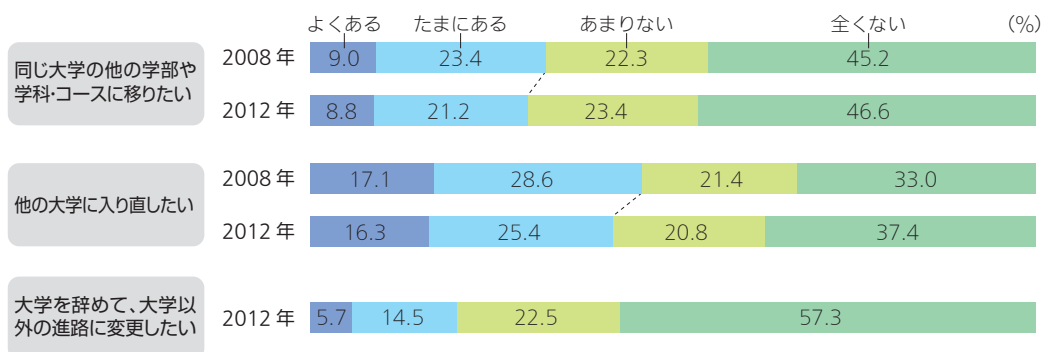
## 「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」と思うことのある学生が2割

「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」(学内での転学部・転学科)を考えたことのある学生の割合は30.0%〔「よくある」+「たまにある」の%、以下同〕、「他の大学に入り直したい」(他大学への編入・再入学)については41.7%で、いずれも4年前から大きな変化はない。また、「大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい」(大学以外の進路変更)を考える割合は20.2%であった(図27)。これら3項目について、入学時の大学志望度と、専攻の学問分野の一致度に分けて違いをみたものが図28である。「他の大学に入り直したい」は、いずれも大学志望度、学問分野の一致度による差異が大きい、その他の2項目では学問分野の一致度の方で、差異が大きくなっている。希望した分野の学部・学科に入れなかったことの方が入学後の影響が大きいことが推察される。



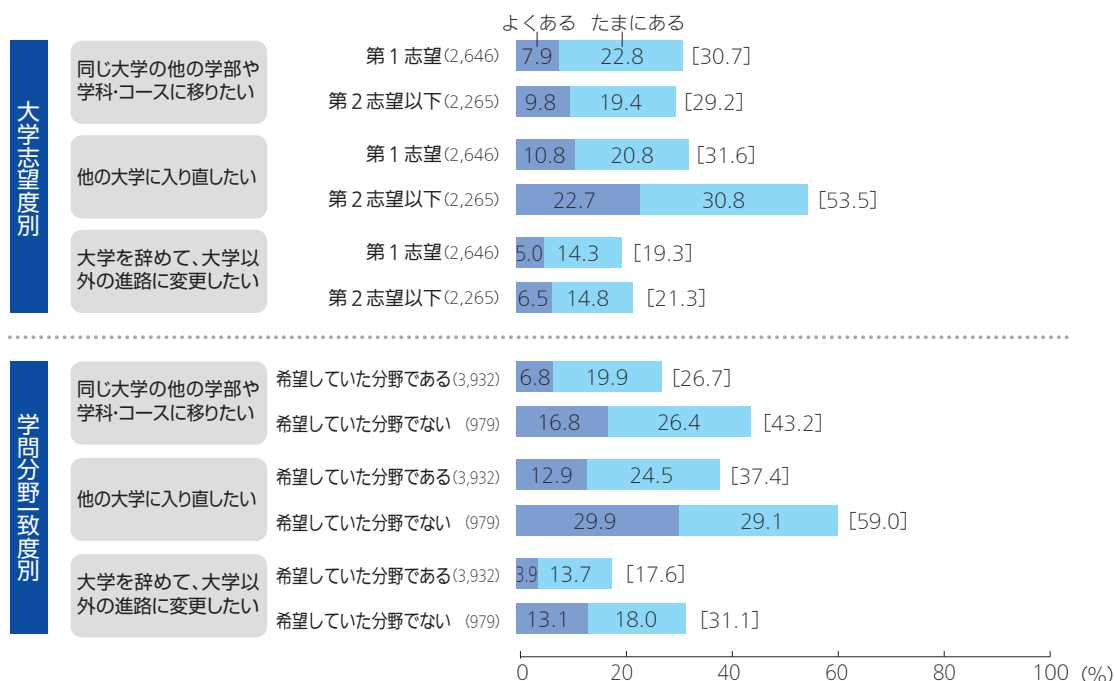
あなたは現在の大学生活の中で、次のように思うことはありますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図27 入学後の進路変更の意向(経年比較)



注)「大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい」は2008年調査ではたずねていない。

図28 入学後の進路変更の意向(大学志望度別・学問分野一致度別)

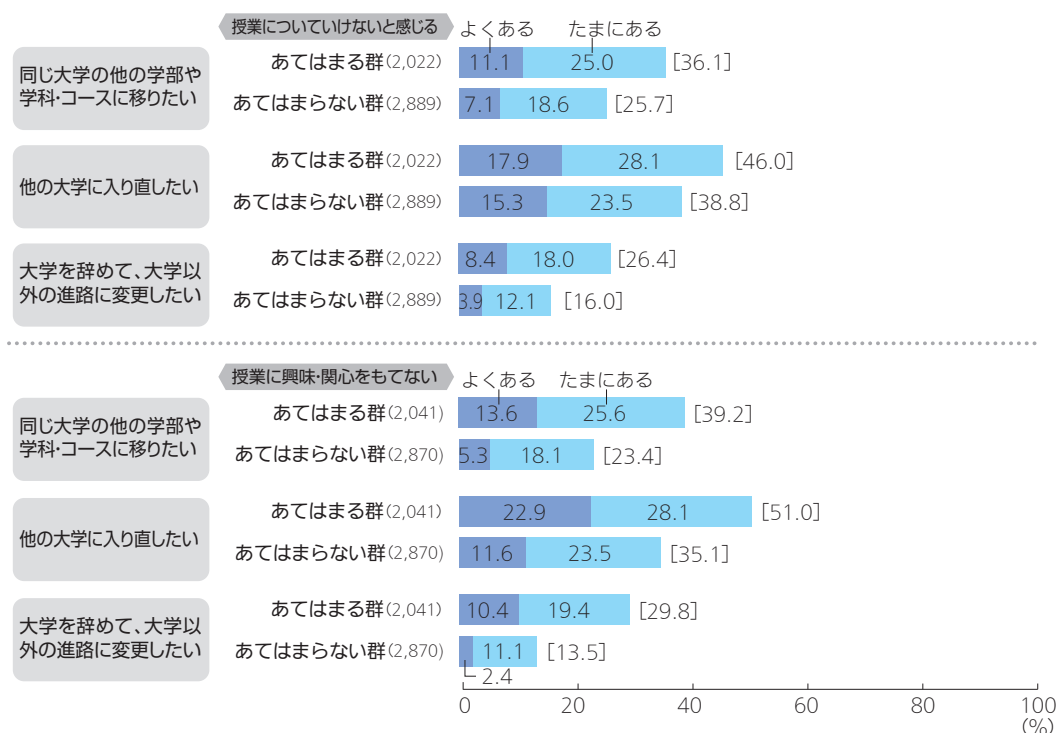


注1) 学問分野の一致度は、「現在通っている大学の学部・学科は入学前にあなたがもっとも学びたいと思っていた学問分野でしたか」との質問に対し、「はい」「いいえ」で回答してもらったもの。「希望していた分野である」は「はい」、「希望していた分野ではない」は「いいえ」を表す。

注2) [ ]内は「よくある」+「たまにある」の合計(%)を表している。図29も同じ。

次に、授業に対する意識別に違いをみたものが図29である。「授業についていけないと感じる」「授業に興味・関心をもてない」について、「あてはまる」と回答した群と「あてはまらない」と回答した群に分けて比較をした。3つの項目のいずれも「あてはまる群」の方が高く、「授業についていけないと感じる」で各項目ともそう考える割合（「よくある」＋「たまにある」の％）に10ポイント程度の差異、「授業に興味・関心をもてない」で15ポイント程度の差異となっている。表6は、3つの項目それぞれについて「よくある」と回答した学生の、その理由についての記述内容から多く見られた内容をまとめたものである。比較的前向きな理由もある一方で、入学前のイメージとの不一致や経済的な事情といった理由も少なくない。

図29 入学後の進路変更の意向（授業適応度別）



注)「あてはまる群」は3つの各項目について「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した人、「あてはまらない群」は「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した人を表す。

表6 入学後の進路変更を考える理由（自由記述分析）

質問内容	カテゴリー	記述内容例
同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	1. やりたいことの変更／発見	勉強したい分野と今の学部で学べる分野とが違うから／大学に入った後に本当にやりたいことが決まったから
	2. 他の分野への興味	他の学問を学びたかった。今の学部の勉強に興味がない／幅広くもっといろいろなことを学びたい
	3. イメージとの不一致	現在の学科は理想と違っていたから／学びたい内容と現実の差／勉強内容が自分に合わなかったから
他の大学に入り直したい	1. 不本意入学	勉強しなおして第一志望だった大学に入学したい／第一志望が諦められなかった
	2. レベル・知名度	学歴に対して劣等感がある／学校自体のランクが低い／大学(学生)のレベルが低い／知名度が低い／大学名
	3. 大学の雰囲気	大学の雰囲気は全く合わない／大学の規模が小さい／キャンパスの周辺に何も無い／田舎すぎる／立地が悪い
大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい	1. やりたいことの実現	将来やりたいことが別にできたため／起業などをしてみたい／海外へ行きたい／大学に行く意味を感じられない
	2. 就職・経済的な事情	学費が高い／就職してお金を稼ぎたい／このまま大学にいて就職できるか不安／早く経済的に自立したい
	3. 専門学校希望	専門学校で芸術分野を学んでみたかった／もともと専門学校に行きたかったが親に許してもらえなかった

注)3つの項目別に、「よくある」と回答した人に対し、その理由をたずねたもの。

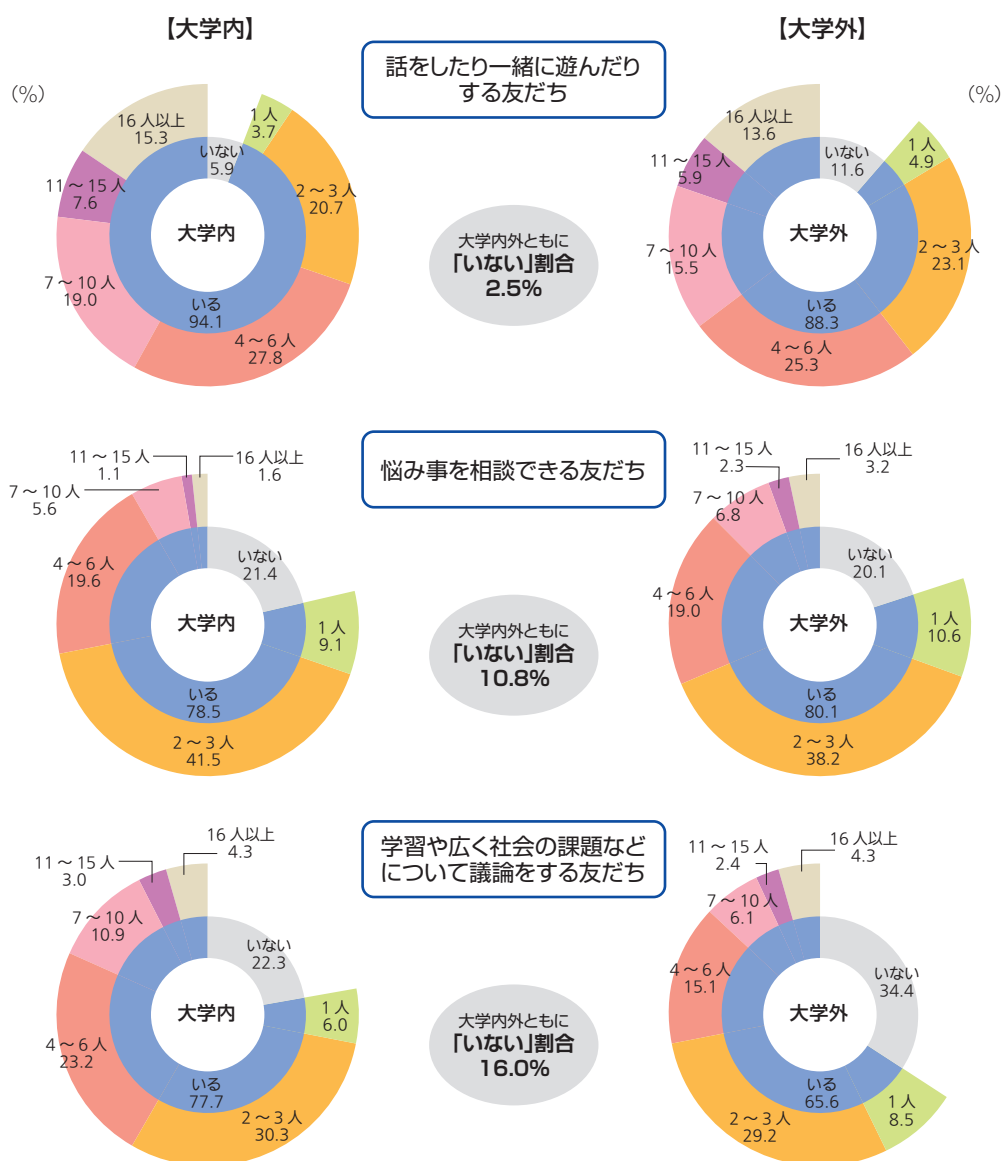
## 話をしたり遊んだりする友だちは4～6人、悩みを相談する友だちは2～3人で最多

大学の内外に分けて友だちの数をたずねた。「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」が1人以上いる割合は大学内94.1%、大学外88.3%である。人数はいずれも「4～6人」が多い。「悩み事を相談できる友だち」は大学内78.5%、大学外80.1%で、人数は「2～3人」が多い。「学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち」については大学内77.7%、大学外65.6%と大学内が多くなっている。一方、友だちが「いない」方に着目すると、「悩み事を相談できる友だち」が大学内外ともに「いない」学生が全体の1割ほど存在している。



現在、付き合っている友だち(大学内・大学外の友だちも含む)との関係についてお聞きます。次のようなことをする友だちは全部で何人くらいいますか。

図30 友だちの数(全体)



注) サンプル数は4,911名。



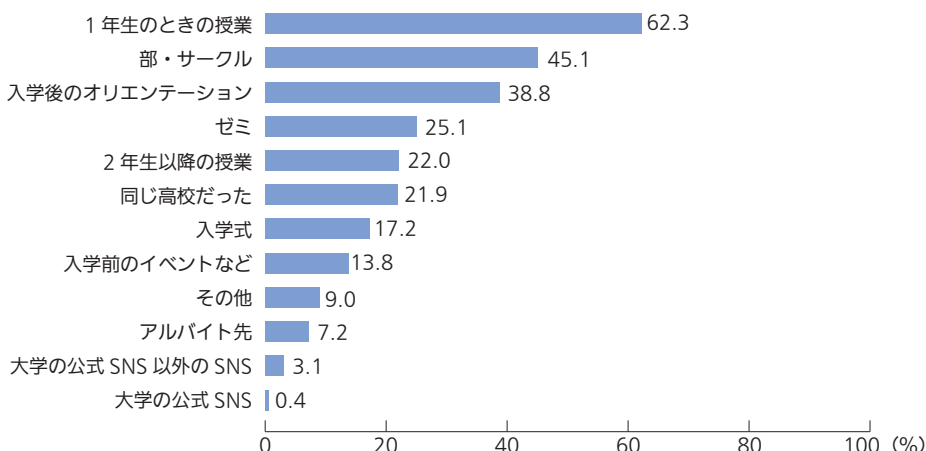
## 友だちづくりには1年生の時の授業が重要

仲良くしている友だちと知り合ったきっかけは、「1年生のときの授業」が約6割でもっとも多い。友だちとの関係について、「一人で行動していても気にならない」「違う意見を持った人とも仲良くできる」との回答（「とてもそう」+「まあそう」の%、以下同）が8割を超え、自立した対人意識がうかがえる一方で、「友だちと話が合わない」と不安を感じる「一人で食事をしているところを人に見られたくない」も4割程度にのぼる。



大学で今仲良くしている友だちとは、何をきっかけに知り合いましたか。あてはまるものすべてお選びください。

図31 友だちと知り合ったきっかけ（全体）

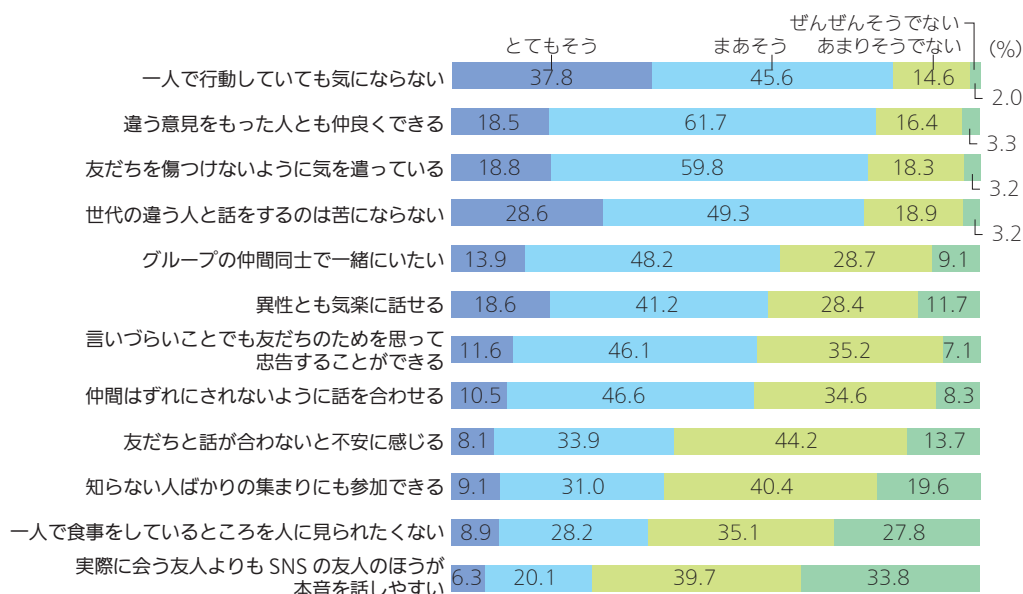


注1)複数回答。注2)サンプル数は4,911名。



友だちとの関係について、次のようなことはどのくらいありますか。

図32 対人関係に関する意識（全体）



注)サンプル数は4,911名。

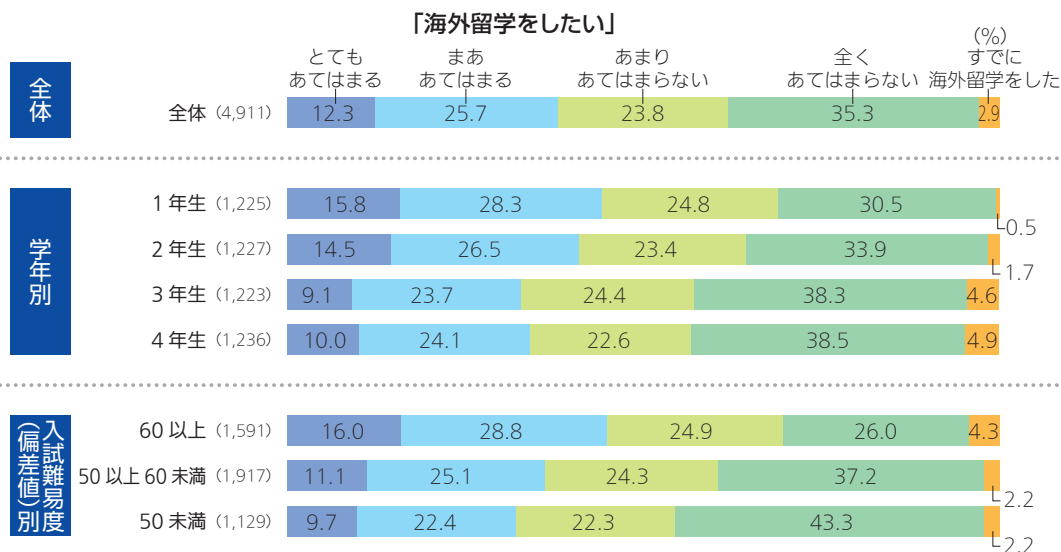
## 「海外留学をしたい」と考えている学生は4割

在学中に「海外留学をしたい」と思っている学生の割合（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%）は全体の38%。「すでに海外留学をした」（2.9%）と合わせると4割が留学を肯定的に考えている。留学したいと思う理由については、「語学力を身につけたいから」（80.8%）、「海外生活を体験してみたいから」（71.7%）の2つが高かった。



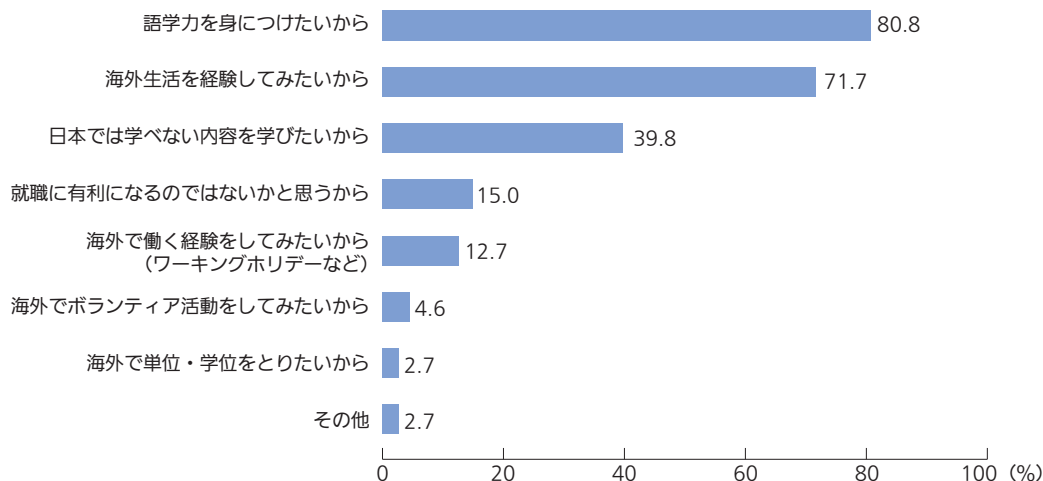
あなたの在学中(大学・大学院)の海外留学の意向について、あてはまるもの1つをお選びください。在学中にすでに留学をした方は「すでに海外留学をした」を選択してください。

図33 在学中の海外留学の意向（全体・学年別・入試難易度別）



あなたが留学したいと思う理由についてもっともあてはまるものを3つまでお選びください。（「すでに海外留学をした」と回答の方は、留学した時を振り返ってお答えください。）

図34 留学したい理由（全体）



注1) 複数回答。

注2) 対象は、「海外留学をしたい」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」「すでに海外留学をした」と回答した2,009名。

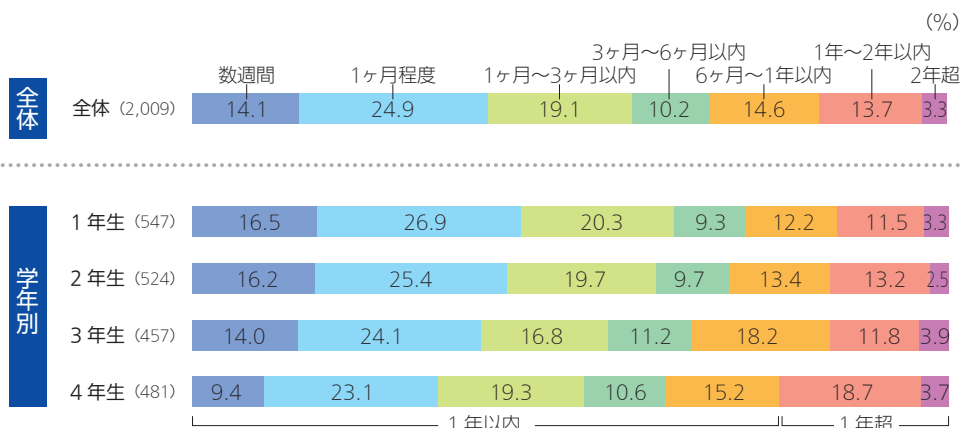
## 希望する留学の期間は「数週間～1ヶ月程度」が4割、時期は「2年生」が最多

希望する留学期間は全体の39%が1ヶ月以下(「数週間」+「1ヶ月程度」の%)のショートステイ型である。希望する留学時期は「2年生」がもっとも多い。学年別では、本調査の実施時期が11月だったこともあり、当該学年の次の学年を希望している割合が大きい。4年生では「2年生」が33.9%ともっとも高くなっており、振り返ってみれば「2年生」で留学するのが適していたと感じている人が多いことを表しているものと思われる。



留学の期間として、もっとも希望に近いもの1つをお選びください。  
(「すでに海外留学をした」と回答の方は、実際に留学した期間をお答えください。)

図35 希望する留学期間(全体・学年別)

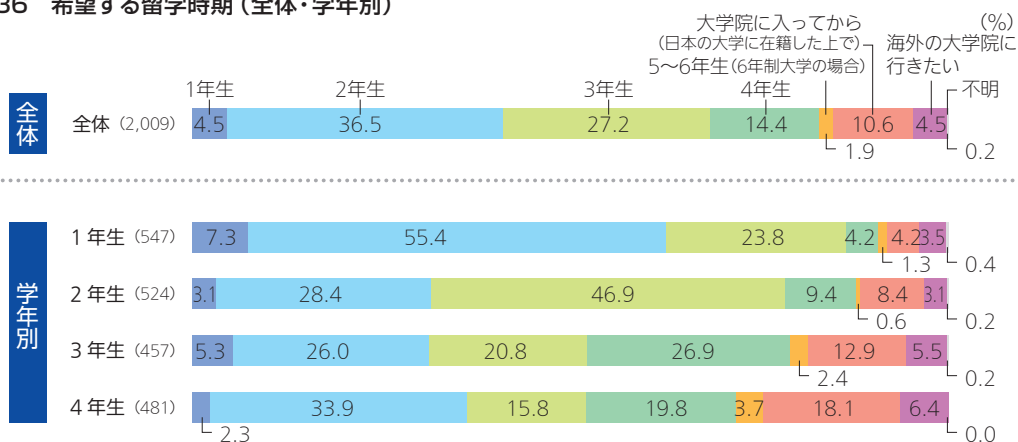


注)対象は、「海外留学をしたい」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」「すでに海外留学をした」と回答した2,009名。



留学する時期として、もっとも希望に近いもの1つをお選びください。  
(「すでに海外留学をした」と回答の方は、実際に留学した時期をお答えください。)

図36 希望する留学時期(全体・学年別)



注)対象は、「海外留学をしたい」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」「すでに海外留学をした」と回答した2,009名。

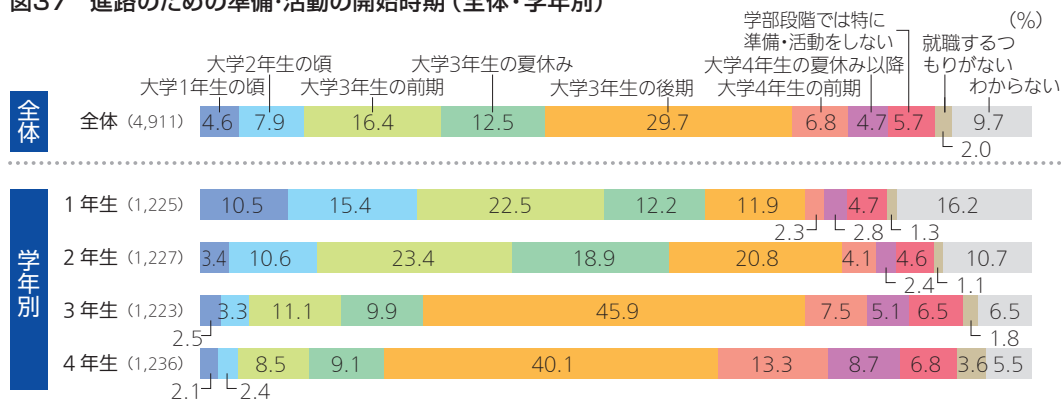
## 4年生の4割が進路のための準備・活動を3年生の後期に開始

進路のための準備・活動の開始時期(予定含む)は、4年生の回答をみると、40.1%が3年生の後期に開始している。1・2年生では早期から準備を開始しようと考えている様子が見えが、現実的にはそうになっていないようである。1・2年生の回答で低学年次からの開始の割合が大きい傾向は2008年調査でもみられたので、とくに低学年次で早期化しているとはいえない。また、進路支援の活用状況をたずねたところ、「大学での、単位の出ないキャリア形成支援」を3年生の約5割が利用しており、もっとも多い(「よく活用している」+「たまに活用している」の%)。



大学卒業後の進路(就職、大学院進学等を含む)に向けた準備・活動をいつ頃から始めようと考えていますか(あるいはいつ頃から始めましたか)。あてはまるもの1つをお選びください。

図37 進路のための準備・活動の開始時期(全体・学年別)

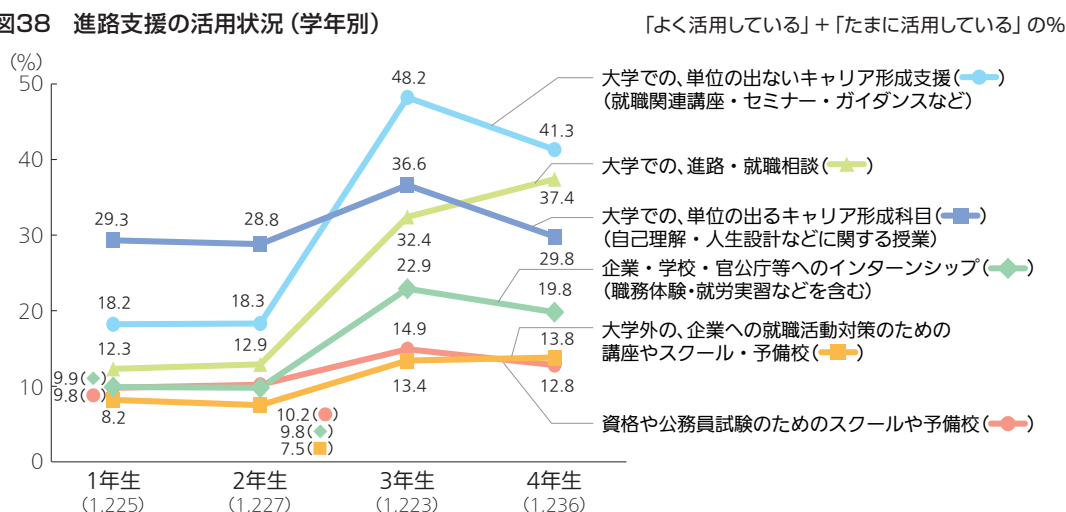


注) 2008年調査とは母数の条件が異なるため比較はしていない。



大学卒業後の進路の決定・検討のために、以下をどの程度、活用してきましたか。それぞれあてはまるもの1つをお選びください。

図38 進路支援の活用状況(学年別)



注) 選択肢は「よく活用している」「たまに活用している」「あまり活用したことがない」「活用したことがない」の4段階。

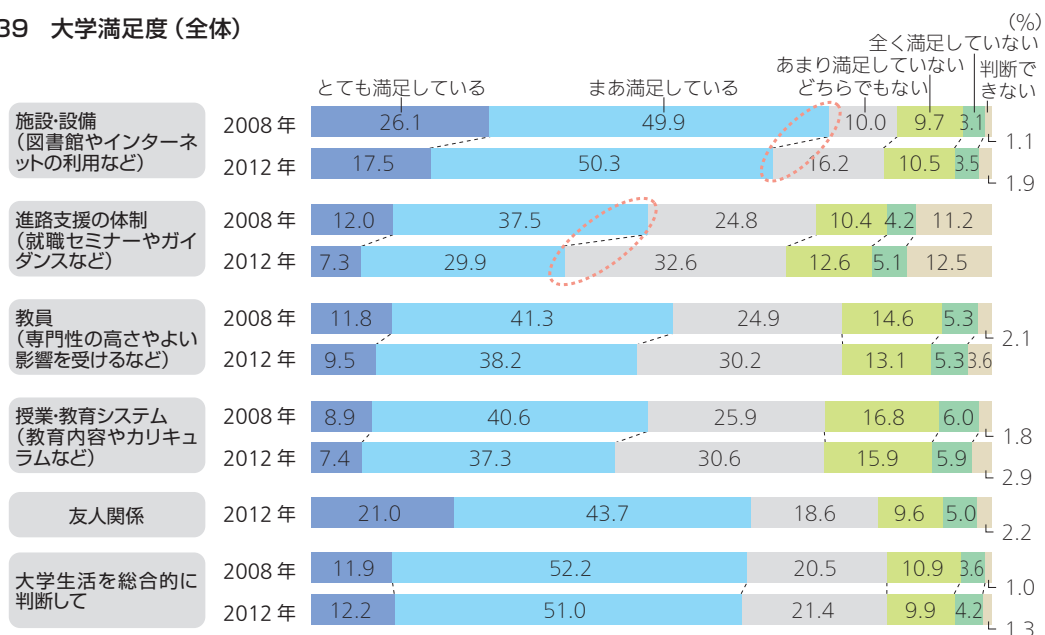
## 進路支援の体制に対する満足度が減少

2008年度比で満足度(「とても満足している」+「まあ満足している」の%、以下同)に減少傾向がみられる。減少幅の大きい項目は、「進路支援の体制(就職セミナーやガイダンスなど)」12.3ポイント減、次いで「施設・設備(図書館やインターネットの利用など)」が8.2ポイント減で、いずれも「どちらでもない」が増加した。「進路支援の体制」について学年別に経年比較をすると(図40)、どの学年も「どちらでもない」が増えているが、「2年生」については「満足していない」(「あまり満足していない」+「全く満足していない」の%)も6.1ポイント増加している。2008年以降の厳しい就職状況を背景に、低学年次での進路支援のニーズが高まっているのかもしれない。



現在通っている大学について、どのくらい満足していますか。それぞれについて、あてはまるものの1つをお選びください。

図39 大学満足度(全体)



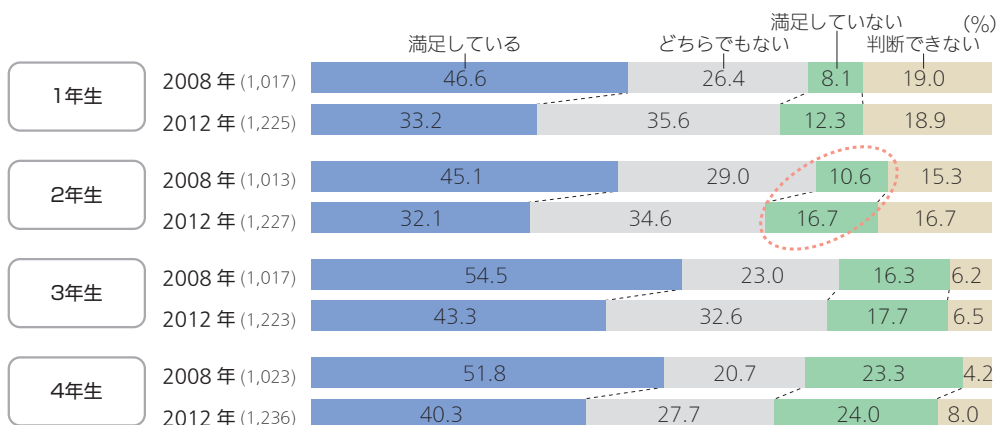
注1)「友人関係」については2008年調査ではたずねていない。

注2)2008年調査から「とても満足している」+「まあ満足している」の割合(%)に5ポイント以上の違いがみられたものに○をしてしている。

注3)サンプル数は2008年4,070名、2012年4,911名。

図40 「進路支援の体制」の満足度(学年×経年別)

「進路支援の体制(就職セミナーやガイダンスなど)」



注)「満足している」は「とても満足している」+「まあ満足している」の%、「満足していない」は「あまり満足していない」+「全く満足していない」の%を表す。

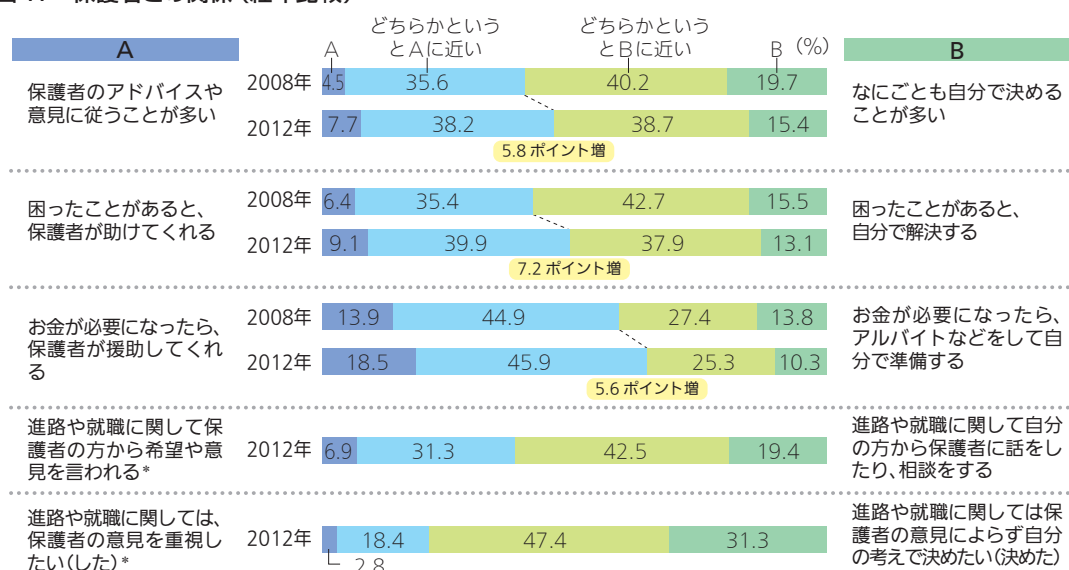
## 保護者への依存度が高まっている

2008年に比べて、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」が5.8ポイント増で45.9%（「A」+「どちらかというAに近い」の%、以下同）、「困ったことがあると、保護者が助けてくれる」が7.2ポイント増で49.0%と約半数になった。「お金が必要になったら、保護者が援助してくれる」も5.6ポイント増で64.4%となり、全体的に保護者に頼る方向に変化している。また、学年別にみると、学年が上がるほど「なにごととも自分で決めることが多い」や「困ったことがあると、自分で解決する」の比率が高くなる。1年生と4年生では1割前後の違いがみられ、大学生活を通して親離れをしていく学生もいるようだ。



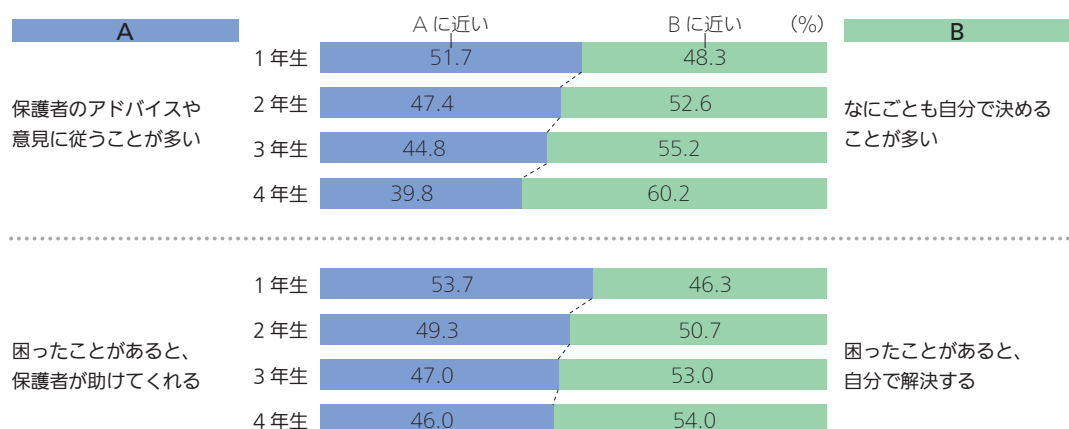
あなたと保護者との関係について、それぞれについてもっとも近いもの1つをお選びください。

図41 保護者との関係（経年比較）



注1)\*の項目は2008年調査ではたずねていない。 注2) サンプル数は、2008年4,070名、2012年4,911名。

図42 保護者との関係（2項目・学年別）



注1) 「Aに近い」は「A」+「どちらかというAに近い」の%、「Bに近い」は「B」+「どちらかというBに近い」の%を表す。

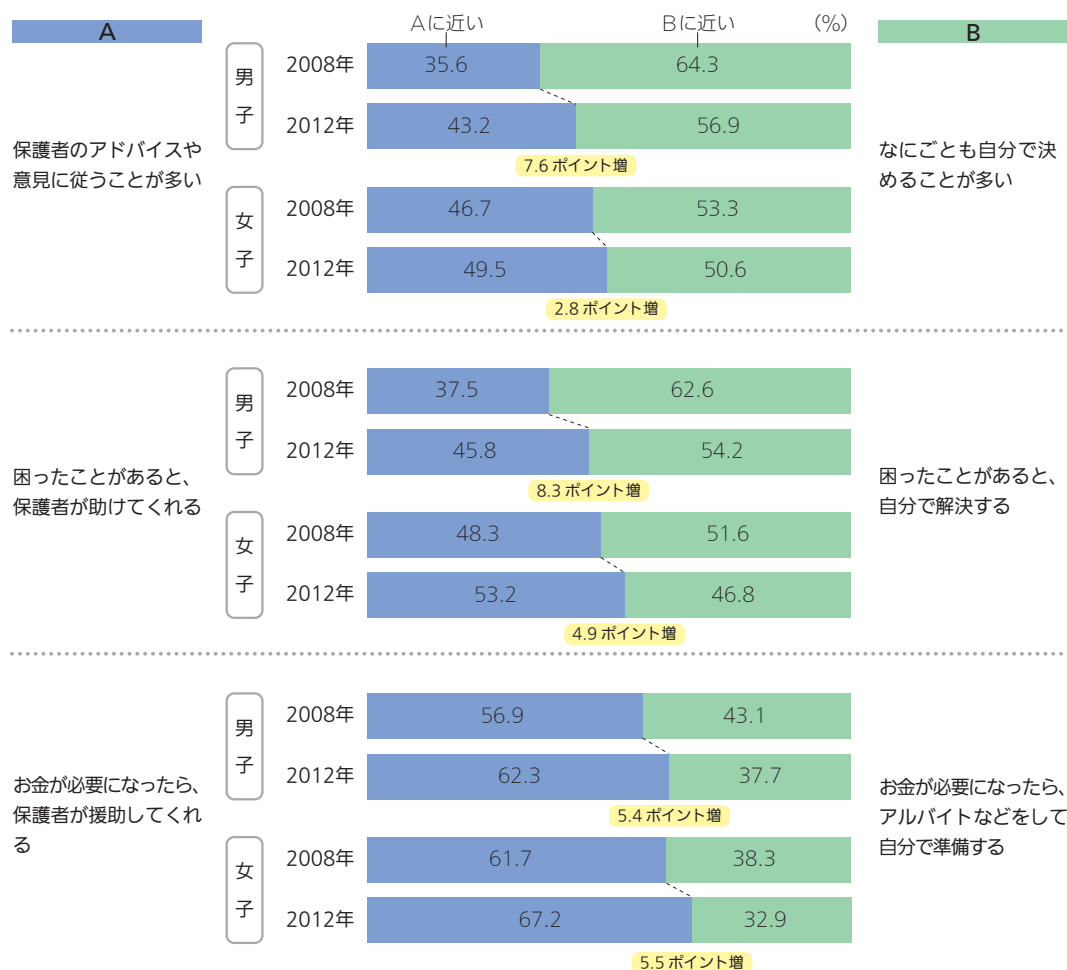
注2) 学年別に違いのみられた2項目のみ示している。

注3) サンプル数は1年生1,225名、2年生1,227名、3年生1,223名、4年生1,236名。

## 男女の差は縮小傾向

性別でみると、女子の方が全般に保護者への依存度が高いが、性別の経年変化をみると、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」は、女子が2.8ポイント増の49.5%に対し、男子が7.6ポイント増の43.2%と、男女の差が縮まりつつある。

図43 保護者との関係（性別×経年）



注1)「Aに近い」は「A」+「どちらかというAに近い」の%、「Bに近い」は「B」+「どちらかというBに近い」の%を表す。

注2) サンプル数は2008年男子2,439名、女子1,631名、2012年男子2,791名、女子2,120名。



## 「海外で活躍したい」3割、「仕事上で必要ならば海外で働くこともいとわない」5割

大学生は、「いい友だち」と「お金」をもつことは幸せにつながることでありと認識しているが、「努力すればむくわれる社会」と考える割合（「とても」＋「まあそう思う」の％、以下同）は半数に満たず、同様に「いい大学を卒業すると将来幸せになれる」といった学歴の価値を肯定する割合も4割程度にとどまる。それらの傾向に2008年からの大きな変化はみられない。仕事については、「将来、海外で活躍したい」と積極的に考えている学生は34.4％であるが、「仕事上で必要ならば海外で働くこともいとわない」と考える割合は53.8％と約半数に増える。



あなたは次のようなことについてどう思いますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図44 社会観（経年比較）

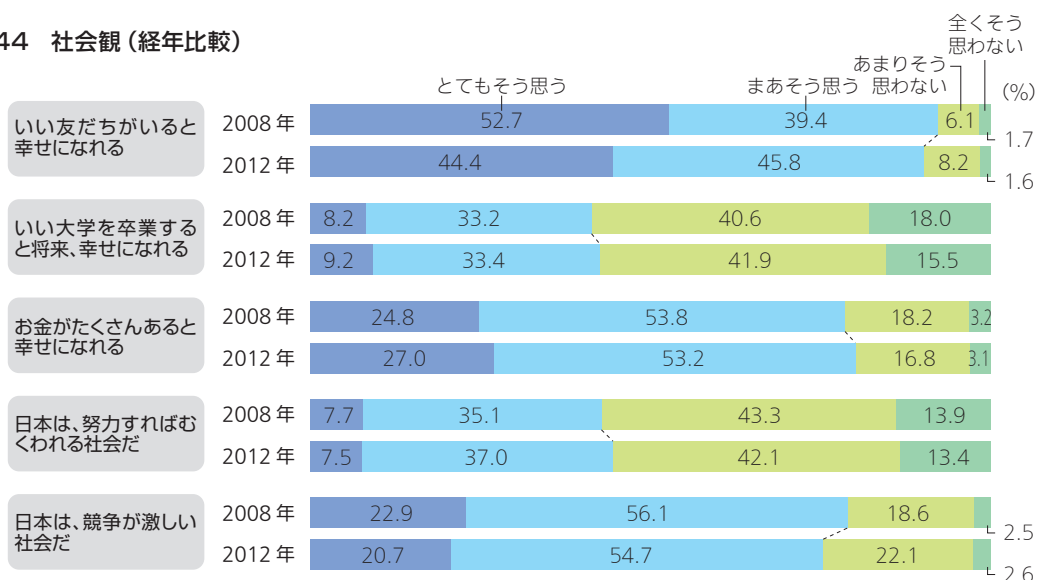
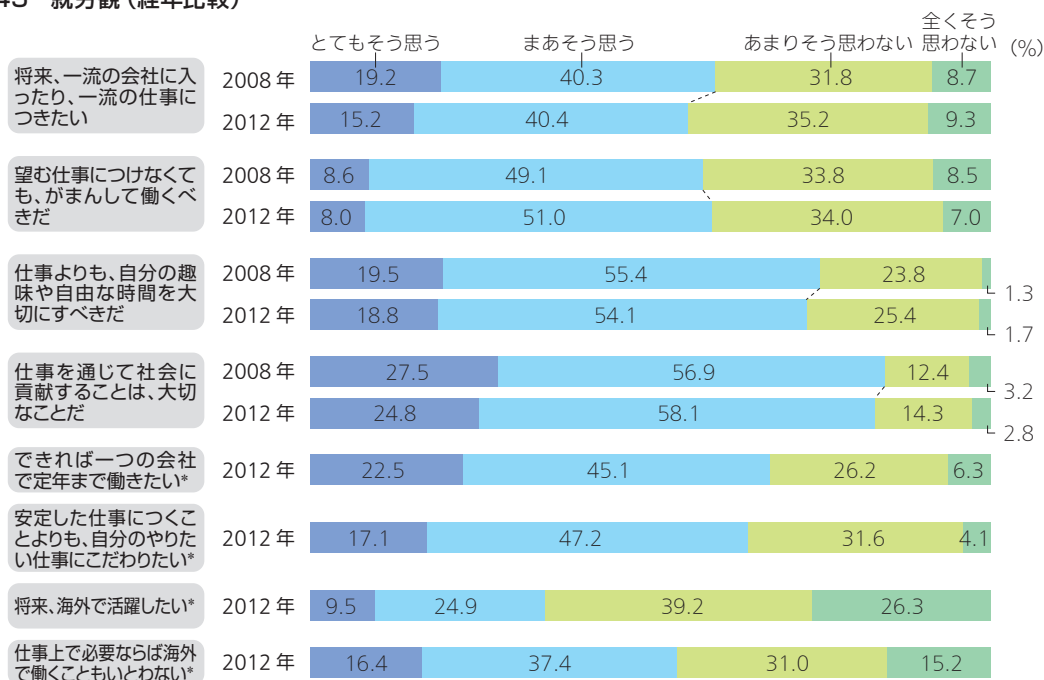


図45 就労観（経年比較）



注1)\*の項目は2008年調査ではたずねていない。 注2) サンプル数は図44-45とも2008年4,070名、2012年4,911名。

---

## 第2回 大学生の学習・生活実態調査

発 行 2013年4月15日  
発 行 人 岡田大介  
編 集 人 谷山和成  
発 行 所 (株)ベネッセコーポレーション  
印刷・製本 牟禮印刷(株)  
企画・制作 Benesse教育研究開発センター  
〒206-8686 東京都多摩市落合1-34  
TEL:042-311-3390  
Webサイト <http://benesse.jp/berd/>  
編 集 協 力 (株)ジー・アンド・ピー  
表紙デザイン 森 一典

---

©Benesse Educational Research and Development Center  
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。  
無断転載を禁じます。

# 第2回 大学生の学習・生活実態調査

## 調査企画・分析メンバー

川嶋太津夫（神戸大学 教授）

杉谷祐美子（青山学院大学 准教授）

望月 由起（お茶の水女子大学 准教授）

山田 剛史（愛媛大学 准教授）

谷田川ルミ（立教大学 学術調査員）

樋口 健（Benesse教育研究開発センター主任研究員）

吉本 真代（Benesse教育研究開発センター研究員）

岡部 悟志（Benesse教育研究開発センター研究員）

※所属・肩書は、調査企画・分析時のものです。

本調査の詳細な報告書（188頁）を刊行しております。報告書はBenesse教育研究開発センターのWEBサイトでご覧いただくことができます。

### Benesse 教育研究開発センターの WEB サイトのご案内

Benesse 教育研究開発センターで実施している各種調査の結果は、  
すべて以下の WEB サイトでご覧いただけます。

<http://benesse.jp/berd/>

こちらのサイトは **ベネッセ 研究** **検索** で検索できます。